

統

一

法財人團  
統一團發行

次 目

和歌	二題	○各地教信	○寄附團費誌料領收	彌重まさ子
記事	法華經講話(第二講)	感	所	新年の挨拶
				日蓮教學講座(第五回)
				聖訓摘要
				日生上人
				河合陟明
				上田辰卯
				佐藤鉄太郎
				小林一郎

號月二年九十三第

### 財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラシム事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

### 本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ每年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ每年金五圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ每年金貳圓五拾錢ヲ獻出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方テ誌友トス

## 聖訓摘要

### 富木入道殿御返事

日生上人

法華經と爾前と引き向けて勝劣淺深を判するに、當分跨節の事三つの様有り、日蓮が法門は第三の法門なり。世間に粗ぼ夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候、第三の法門は天台、妙樂、傳教も粗ぼ之れを示せども未だ事畢らず、所詮末法の今に譲り與へしなり、五五百歳は是なり。

(縮刷遺文錄 一六四八)

これは日蓮聖人が、日蓮の力を入れて居る教は第三の法門であるといふことを言はれた名句である。それは法華經の勝れて居る事を證明するに三つの意味がある、その他にもいろいろ澤山あるけれども、古來三種教相と言つて三つの意味がある、それは即ち(一)機根の融不融、(二)化導の始終不始終、(三)師弟の遠近不遠近といふことである。これは面倒な事であるが、判り易く言ふと、法華經と他のお經は第一機根の問題に就て違ひがある、機根の問題といふのは教を受ける所の人々の事で、他のお經は

男は助かつて女は助からんとか、斯ういふ者は救ふけれどもこんな者はいかぬとか言つていろ／＼區別を立て、居る。法華經は如何なる者でも生命のある限りに於ては、男女の別が無いのみでなく一切悉く濟度するといふ所の教を立てたものである。そこで先づ二乗といつて、法華經以前のお經に於ては非常に嫌はれて居つた者の成佛を説き、女人の成佛を説き、悪人の成佛を説き、愚者の成佛を説き、天の雨は高い木も小さい草も皆一様に潤はすといふ意味に於て、一雨三草を潤はすといふ事を法華經は説いた、それが機根の融通する融通しないといふ大きな問題である、他の教はこの人間の心の上に就て眞の平等、眞の價値といふものを、認めて居らないといふのが一つの缺點である。第二は化導の始終不始終といふので、お釋迦様が何時教化を始めて何時教化を終るかといふこの關係である、そこで法華經以外のお經に於ては、釋迦は三十とか三十五の時に成道を遂げて、それから鹿野園といふ所で始めて説教した、それが化導の始である、最後拘尸那城に於て入滅を遂げたから、それで化導が終つたと、斯う考へて居るけれども、それは本當の化導の始と終とを明かさないのである。法華經は、釋迦は今度始めて法をお説きになつたものではない、始め無き以前よりの久遠實成の佛が、この世界の者を救ふ爲めに時を計つて迦毘羅衛城に悉多太子として生れて來たのである、跋提河の邊り拘尸那城に入滅するのも、説くべき法を説き終り、教ふべき者を教ひ終つて出現の目的を達したから安んじて涅槃に入つたので、消えて無くなるものではない、實在の佛は今もなほ存在せり、茲に於て化導は始め無き以前より終り無き

後に續き、横にも十方に活動して居る所の無限絶對の佛であるといふ事を現はしたのが法華經である、他のお經はそれが現はれて居らぬ。そこでこの機根の融不融、化導の始終不始終といふことを第一、第二といふのである、これも大事な問題だけれども、他の人々はこの第一、第二さへも明かでない、所が日蓮はこの第一第二の問題よりは『日蓮が法門は第三の法門なり』で、第三番目に力を入れる、第三番目は何かといふと師弟の遠近不遠近である。師匠といふのはお釋迦様である、弟子といふのは菩薩である、その遠近といふのは、久遠であるか、極く近いかといふことで、釋迦牟尼佛の久遠實成といふことは、從つてお弟子も本化の菩薩といふことになる、觀音様や勢至様といふやうな菩薩でなしに、久遠の本佛と直接の縁の有る所の本化上行等の菩薩を現はして來る。要するに第三の法門は本佛の問題である、審量品の本佛顯本の問題を第三の法門といふのである。吾々がこの統一關に於て力説する事が即ち日蓮の第三の法門といふ事である、世俗のドンドコ法華ナンといふものは第三の法門も何も無い、狸の法門やら狐の法門やら判らぬ、唯だドンドコやつて居る、これは確かに日蓮聖人を辱かしめるものである。石油箱を叩いて『一貫三百どうでもい』といふやうな事をやつて居る、それは勢力を張るのも宜い、發揚的にやるのも宜いけれども、モウ少し謹嚴な態度で日蓮聖人の精神の在る所を知らなければならぬ。又それを知らなければ知らないで『辱かしいことだけれども俺は何も知らぬから、唯だ南無妙法蓮華經』と言つて眞面目にやるなら宜いけれども、『どうでもい、一貫三百』といふことがあるか、あ

れは間違つて居る。宗教の事柄はどうしても敬虔なる態度を執らなければならぬ、であるからあの御會式の時などでも、行く時から歸る迄さう窮窟にやれないならば、せめて山に登つた時だけでも宜い、本當にやらなければならぬ、途中はその代り鉢巻なら鉢巻で何も南無妙法蓮華經は要らぬ、「一貫三百ばかりやつたら宜い、愈々山に登る時には鉢巻も除つて一貫三百などはやめて、「南無妙法蓮華經」といふ何處までも謹嚴な態度を示さなければならぬ。それを山の上まで行つても未だ「一貫三百どうでもいゝ」とやつて居る、あんな事は實に間違つて居る。さういふ點に於ては東京の人士の宗教意識といふものは實に恥づべきことである、今の東京市長がいろ／＼人心の改造とか言つてやつて居られるけれども、この東京人の宗教心の改造といふものを本當にやらぬといふと、日本第一の都會とはなれまいと思ふ。

兵衛志殿女房御返事

この中には別に取出す程のことはありませぬが、前に申した兵衛志の女房が信仰が弱かつたならば、夫を動かして、遂に池上一門の信仰が極らなくなるのであつたけれども、その女房もやはり日蓮聖人に就て行く決心をしたのであつて、洵に結構な事である。そこでこれは日蓮聖人に銅で拵へた器を二つ御供養になつた、これは御寶前に供へる器であるかと思ひますが、その事を賞讃したお手紙を贈られた

のであります。

太田殿女房御返事

此の八寒地獄は、或は寒にせめられたる聲、或は身の色等にて候。此の國の諏訪の御池、或は越中の立山の北風、加賀の白山の嶺の鳥の羽を閉ぢられ、寡婦の裾の冷ゆる、雉子の雲にせめられたるをもて知ろしめすべし。寒にせめられて、頤のわなめく等を阿波波、阿陀陀、阿羅羅等と申す、寒にせめられて身の紅に似たるを紅蓮、大紅蓮等と申すなり。如何なる人の此の地獄に墮つるぞと申せば、此の世にて人の衣服を盗みとり、父母師匠等の寒けなるを見まゐらせて、我は厚く暖かにして晝夜を過す人々の墮つる地獄なり。(維新道文録)

これは普通の八寒地獄に就てのことではありますが、私は大變面白いと思ふて之れを引くのであります。八寒地獄の名前がいろ／＼八つ附いて居るが、それはどういふ所から來て居るかといふと、寒い爲めにふるへて喊いて居る聲から附けた名前、それから寒さの爲めに身の色が變つてかちけて居る有様から附いて居る名前である。即ちその悲しむ聲と、寒さで身のかちけた色から八つの地獄の名前が附いて居るといふことが書かれて居る。その寒さの有様を説明して、信州の諏訪湖は非常に寒い所であるが、あゝいふ所に閉られて居る所の寒さ、或は越中の立山、加賀の白山、さういふやうな所に氷に閉られて

居る凍たさ、或は寡婦の女が薄い衣服を着て寒い日にふるへて居る、その慄へる時に出す「オ、寒い」といふその聲が地獄の名前に現はれて、阿波波、阿陀陀、阿羅羅といふやうな名前がついて居る。それからその寒さの爲めに身體がかちけて柵榴のやうになつて居るのが、紅蓮、大紅蓮といふやうな名前になつて居るのである。さうしてどういふ者がこんな地獄に行くかといへば親や、師匠が寒い風をして御座つてもその事は構はないで、自分ばかり暖かく暮して居るさういふ親不孝とか師匠を忘れた者が墮る地獄であるといふ事をお書きになつて居る。

茲に何を味はふべきかといふと、この地獄の感じといふものは、自分の経験したる事から推して見なければならぬのである、世間には随分寒い所があるでせう、又暑い所もあるでせう、けれども自分が経験しなければそれは判らない。私はこの間北海道に行つた時分に登別温泉の所で湯の湧いて居る所がある、その湯の中に入人が落ちた時の話を聞いたが、「ア、落ちた、可哀想だ」といふので、竹を以つて救ひ上げやうとしてマゴ／＼して居つた、少しグズ／＼して居る間にその落ちた人の身體がスツカリ溶けてしまつて骨ばかりになつた、非常に湯が烈しいものであるから「ア、落ちた」と思つて竿で掻き廻して居る中にトロ／＼に溶けてしまつて、二時間の後には白骨になつて上つたさうであります。それはマア熱い方であるが、寒い方でもやはり非常な雪の中や氷の中に閉ぢ籠められて、身體がかちけるやうな時に「ア、寒い」と思はず聲を出すその寒さといふものは、實際経験を経た者でなければ「ア、寒い」

とはどの位の寒さかといふことは判らぬだらうと思ふ。だから人間は自分が辛いといふことは、その経験の範囲を越えては判らぬ、それも話だけでは判らない、愈々自分が湯の中にでも落ちて、二時間にして白い骨に成つてしまつて見たならば、始めて成程えらい事だといふことが判るだらう。そこで地獄の事を佛様が説いても、誰が説いても、「こんなものだ」といふ時には、人間の経験した事を引いて來る、地獄に行くに閻魔様が釘拔で舌を抜くといふ、「その釘拔は誰が拵へたんぢや」といふやうな事を言ふ者があるけれども、それは馬鹿者である、能く大學の先生などがそんな事を言つて居つた、「地獄に行くからといつても、地獄には竈に火が燃えて居るといふが、その釜は誰が拵へた、その火は石炭を焚いて居るのか薪を焚いて居るのか」……そんな事はどうでも宜い。それはその人間の果報々々に従つて、人間の苦みよりモット／＼ひどい苦みをする所も實在して居るだらう、又更に完全な幸福の世界も實在して居るといふ事を信すれば「それはどういふ風な幸福か」といふ時分には、人間の幸福を感じた経験を積み重ねて、それより尙は結構なものぢやと説くより仕方の無いものである。それを除つてしまつてその他の説き方で、「お前の知らぬ所に斯ういふ結構な所がある、ソラあの通りだ」と言つても何だか判らぬ「ハ、ーン」といふだけである。人間の教を立てるにはその経験の苦、その経験の樂を説いて、それから更に更に教へて行くよりはか人は教へらるべきものでないといふ事を能く了解して、そこで地獄の名前が寒さに慄へて居る聲から附いて居る、身體のかちけて居る色から附いて居るといふ、

これが非常に大事な事なのであります、さうしてそれが實在のものだといふ事をやはり信じなければならぬ、方角やそんな事はどうでも宜い、方角などは人間が自分の位置から考へて居る事であるから、上だの下だのといふことはないけれども、左様な苦しい存在の仕方もあるのである。



# 日蓮教學講座 (第五回)

文學士 河合 陟 明

- ★ 諸の衆生に種々の性、種々の欲、種々の行、種々の憶想分別有るを以ての
- ★ 故に種々に法を説く、作す所の佛事未だ曾て暫くも廢せず
- ★ 是の如く我れ成佛してより已來甚だ大いに久遠なり、壽命無量阿僧祇劫常
- ★ 住にして滅せず……然るに今實の滅度に非ざれども、而も便ち唱へて當に涅槃
- ★ 樂を取るべしと言ふ、如來は此の方便を以て衆生を教化す

(妙法蓮華經如來壽量品)

## 第一章 佛陀の人格的諸相

### 第一節 佛陀の恩徳 (續)

大恩教主釋迦牟尼佛の宗教的大恩に關して、特に親しく世に出で、衆生濟度の勞を取り、無上の福音を説き給ひし世尊の人格と教訓を偲びつゝ、私は上來續々説き來つたのであるが、信仰に依つて私達が憶念するみ佛の親しさ懐しさ美しさ優しさを、せめても是に由つて我と我が心に満たしつゝ、私は再び始に還つて、佛教一切の經典が如何に世尊の大

恩を讃歎し奉つて居るかを、簡略ながら列ねて見よ  
う。(第一回参照)

佛教婦人の典型たる勝鬘夫人の己が信念を佛前に  
於て説きし勝鬘經には劈頭「如來眞實義功德」を讃  
美し、利へ如來の慈悲濟度の常住を謳へる所、  
誠に堂々たる金玉の言であり、其の信仰領解の甚深  
にして透徹せるを、私は又讃歎致し度いのである。  
仰いで惟ひるに佛世尊は、普く世間の爲に出でた  
まふ、亦應に哀愍を垂れ、必ず我をして見るを得  
せしめ給ふべし、是の故に今敬禮したてまつる  
願はくは哀愍して我を覆護し、法種を増長せしめ  
此の世及び後の生、願はくは佛攝受したまへ  
世尊よ、如來は無有限齊時に住したまふ、如來應  
等正覺は後際と等しく住したまふ、如來の無限齊  
の大悲は亦無限齊に世間を安慰したまふ、是の説  
を作す者を是を善く如來を説くと名く  
初の偈は、釋尊の人の世に出でませる特殊の因縁

して讃唱すべき妙文であらう。(方等部代表)

次に、佛教の四恩を説きて有名なる心地觀經を拜  
見すれば開卷第一の讚佛偈に於て、

能く法炬を然して昏闇を破す衆生生死海に没在し  
五趣に輪廻して出期なし善逝(佛)恒に妙法の船と  
なり能く愛流を截つて彼岸に超ゆ大智方便量るべ  
からず恒に衆生に無盡の樂を與ふ能く世間の大  
慈父となり一切の諸の有情を憐愍す今大聖牟尼  
尊を見たてまつる猶ほ盲龜の浮木に値へるが如し  
と、誠に讃唱すべき偈文である、特に「能く世間の  
大慈父」云々の句は最も名句であつて佛陀の人格的  
恩徳の中心を示して餘蘊なく宗教意識の醇味を嘗め  
しむるのである。而て更に又佛教に現れた名前だけ  
の佛は数多くあるも、我等人類の間に降誕し給ひし  
血肉の佛陀は獨り釋迦牟尼佛である、此の特殊の因  
縁を高調力説して佛の出世に値ひ難きを述べ渴仰恭  
敬の誠心を吐露して居るのである。

一〇  
を感謝し、世尊の大悲は必ず我を捨て給はざるべき  
を申べ、以て自己の固有せる法種即ち佛性を啓發増  
長せられて、此の世及び後の生に亘つて共に世尊の  
哀愍加護あらん事を願ふのである。

後の讚文は、是れ如來の御身の妙體妙用を説くも  
の、即ち如來の妙體は無限の時間に亘りて無限の存  
在なるを申べ、而も其の永存は即ち又無限の大慈悲  
もて無限の世間即ち一切衆生を安慰し給ふと云ふ、  
之如來の妙用を説いて餘蘊無きもの、此句は全く之  
法華經の如來壽量品の本佛願本に對する一大助證に  
して、勝鬘夫人の領解信仰を告白せる如來常住とい  
ひ、哀愍衆生、安慰世間といひ、之實に「每自作是  
念、以何令衆生」といふ如來の親ら宜ませし其  
の大恩を此處にも亦感激讃歎し奉つてゐるのであ  
る。凡そ私達の如來に對する信解は常に毎に是の  
如きものでなければならぬ、「善く如來を説くと名  
く」とは誠に宜なる哉、此等の一聯の句は毎に憶持

更に般若部の中よりも有力なる文證を求めんに、  
大品般若經に云く、

佛方便道を以て衆生を度し、福德を獲せしめんが  
爲の故に是の諸欲を受け、菩薩智慧に於て著する  
無く、礙ふる無く、欲染を爲さず、  
三事を以ての故に、衆生をして善根を種らしめん  
と欲するが故に、衆生と其の事を同ぜんと欲する  
が故に受く、  
衆生をして福德を積み獲せしめんが爲に、如來は  
和光同塵して著欲染受の煩惱の世に出で來られ、衆  
生と境界を同じうし、事を同じうして之を淨らかに  
し導き給ふ大慈悲の方便の業は此處にも明かに謳は  
れて居る。是れ寔に留意感佩すべき事柄である。  
更に法華部の主典たる法華經の教詔は最初に記し  
た所であるが、更に尙此義を助顯せんが爲に感激多  
き聖語を此部の中より尋ねて見よう。大法鼓經に云  
く、

諸の如來は諸の菩薩の爲に是の如き説を作したまふ、奇なる故難行、釋迦牟尼世尊、五濁の國土に於て世に出興し、苦惱の衆生の爲に種々の方便もて大法鼓經を説きたまふと

見よ是れ釋尊が人の世に降誕し諸種の艱難を親しく嘗めて我等を濟度し給ふ勞苦を稱歎するのである。諸佛の名は多しと雖も事實に人の世に生れ濁濁なる巷に立つて濟度の勞を取り給ふたは實に我が釋尊一佛なりと感歎するのである。而も之が特に諸佛如來の口によつて唱へられたのは、苟くも釋尊に對する歸依を忘れて他土他佛に向ふべきに非ざる事を誡告するのである。實に我が釋迦牟尼世尊は其の御名の如く我々世間の最尊として君臨し給ひ、凡愚の我々世間の衆生に直接して種々の方便即ち之に適當せる恰好の方法を以て甚深微妙の大法を説き給ふのである。

抑も先づ佛が人間と等しき身體相好や等しき精神

してゐる。大涅槃經師子吼菩薩の讚佛偈に云く、

如來は無量の功德聚なり我れ今廣く宣説すること能はず今衆生の爲に一分を演べん惟だ願はくは哀愍して我が説くを聽し給へ衆生は無明の暗中を行くに具さに無邊百種の苦を受く世尊は能く之を遠離せしめたまふ是の故に世に稱して大悲と爲す衆生は生死の繩を往返して放逸迷荒にして安樂無し如來は能く衆に安樂を施したまふ是の故に永く生死の繩を斷す佛は能く衆に安樂を施すが故に自ら己樂に於て貪樂せず如來は能く教へて修習せしむること猶ほ慈父の一子を受するが如し佛は衆生の煩惱の患を見て心に苦むこと母の病子を念ふが如し世間は皆無明の蒙に處して智術の能く之を破ること有る無し如來の智術は能く啄壞す有の河は洄復して衆生没す無明に盲ひられて出づるを知らず如來は自度し能く彼を度す是の故に佛大船師と稱す如來世尊は怨親無し是の故に其の心常に平等

感覺を以て生活し以て人間の苦みを苦しみ人間の樂みを樂しみ、凡て人間と感覺や情意を同じうせらるゝが故に能く衆生の表裏内外餘す所無く其の真相に體達して拔苦與樂の教法を説き其の治術を講ぜらるゝ事が出来るのである。若し佛が是の如き濟度の方法を取られなかつたならば、御親ら世人の模範としての教と行とを示す事能はず、以て世人の學び得る所とならず、一切萬般性情相通ぜずして、現實眼前に現身の師父として、我等五濁の迷妄に苦しめる衆生が親しく仰ぎ見る懐しさは起り來らないであらう。實に此の一聯の偈文は、此の地上の娑婆世界人類の間に歴史的の事實として降誕せられたる釋尊の慈愛と救濟の徹底等、我等との特殊の關係深厚の因縁を讚嘆せるもの、實に適切懇切の金言であるではないか。

而て是の如き世尊讚美の聲大恩感激の思は彌々熾烈と爲り來つて涅槃の夕に至つては正に最高調に達

なり我れ師子吼して大悲を讚す能く吼へて無量に師子吼し給ふを

又次に迦葉菩薩の讚佛偈に云く、

世間は憐愍し給ふ大醫王身及び智慧俱に寂靜なり無我法中に眞我あり是の故に無上尊を敬禮す如來の功德は十方に滿てり凡下の無智は讚すること能はず我れ今慈悲心を讚歎したてまつる身口二種の業に報ぜんが爲なり世間は常に自の利益を樂ぶも如來は終に是の事を爲さず如來は即ち是れ衆生の母なり自ら衆苦を受くるも衆生を念じ慈悲を念として時に心に悔いず憐愍の心盛にして苦を覺えず故に我れ拔苦者に稽首す如來は苦を受くるも苦を覺えず衆生の苦を見ること己の苦の如し一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ如來一人の苦なり佛は一味の大慈心を具し衆生を愍念すること子想の如し衆生は佛の能く救ひたまふを知らず故に如來及び法僧を誘す唯だ諸佛のみあつて能く佛を



讃せん佛を除いては能く讃歎する者無けん我れ今  
 唯だ一法を以て讃せん所謂慈心もて世間に遊びた  
 まふ如來の慈は是れ大法聚なり是の慈は亦能く衆  
 生を度す即是れ無上の眞解脱なり解脱とは即  
 是れ大涅槃なり

諸子！色心を清めて靜かに此の聖語を拜せよ、  
 佛陀の靈威の直ちに其の心腑に下るを覺ゆるであら  
 う。誠に佛の慈悲は超越的ならず未來的ならず、現  
 に此の人の世に隨應出現して母の愛子を又病子をい  
 つくしむ養ひ育て、看護に餘念無きが如くである。  
 『如來は即是れ衆生の母なり』と、母とは最も温  
 かなる慈愛を表すもの、佛を父としての信仰意識は  
 諸經に多く説く所なるも、母としての意識は此經の  
 特色である、如來の涅槃し給ひし時にも『嬰兒の母  
 を失へるが如し』と悲泣して居る、感慨殊に深きを  
 覺ゆるのである。而して如來は一切衆生の異の苦即ち  
 千種萬様の苦を受くるは、悉く如來一人の苦として

寂なる智慧のみの境涯に非ず、此の如來の積聚し如  
 來より發動する大慈悲功徳を一度び我が因縁熟する  
 毎に之を授與せられ之を受得獲得して我も亦此の涅  
 槃不死の常樂境に大向上を成しゆく事が出来るの  
 である。あゝかの佛陀の信仰に迷ふて彌陀や大日や  
 藥師や他佛他菩薩はた又抽象的眞理や萬有神的地  
 にある者、此の文を見て如何の感想をか浮ぶる、此  
 の隨世間の佛陀即ち人類降誕の我が釋迦牟尼佛、此  
 の現實生身の師主慈父大覺世尊を忘れ軽んじて匆卒  
 にかの他佛を緣じかの他佛に走らんとする人々よ、  
 此の文を拜して驚覺する所なきか、汝等罪業深うし  
 て是の如きの妙旨、是の如きの正義に感孚する能は  
 ざるか、見よ佛教徒の渴仰の對象は此の二句の明教  
 に在りても既に分明ではないか、我執を捨てよ、法  
 執を去れよ、詭辯を止めよ、乞ふ洗面一回し來りて  
 明窓淨几の下おもむろに此の聖訓を三誦せん事を。  
 上來引證の諸文ひとしく皆釋尊の大恩を讃歎せ

感受せられ、一味平等の大慈心を以て一子を念ふが  
 如くに之を感念濟度せらるゝのである。然るを衆生  
 は痴かにして迷惑して此の佛の能く我を救ひ給ふ所  
 以を知らず、知らざるを以ての故に如來及び法僧の  
 三寶尊を誹謗す、大恩教主釋尊の絶大の威徳恩徳は  
 唯だ諸佛のみあつて之を讃歎するを得ん、諸佛を除  
 いては能く眞實に讃歎し得る者無し、斯くて止むべ  
 きに非れば我れは今唯だ一事を以て讃歎の至情を吐  
 露し奉らん、『所謂慈心もて世間に遊び給ふ、如  
 來の慈は是れ大法聚なり』と、此の二句一聯の文字  
 は殊に心肝に銘するではないか、此の初句は如來の  
 出現即ち隨世間の慈悲を歎じ、後句は其の慈悲即  
 眞理の結晶なる事即ち法佛不二の大人格を歎するの  
 である。此の二句は實に此偈中の骨子たり又實に全  
 佛敎の心髓を道破せるものと謂ふべきであらう。而  
 て解脱と云ひ涅槃と云ふも、皆是れ大慈悲の大活動  
 的境涯を誦へるもの、決して冷かなる眞如とか又靜

るに非るは無い。而して一代聖敎の經典中其の滋醇の  
 美味は此の讚佛偈に在りと言ふも過言では無いであ  
 らう。抑も佛陀が此の世に出現せられたるは、遠き  
 以前より其の因縁深厚なるものあり、正に機縁が醇  
 熟したるに由り、其の機に應じて出生し給ひしもの  
 之を「牽縁應生」と稱して、縁を牽いて衆生に應じて  
 生れ來られしもの、又之を「隨逐化」の大恩と稱して  
 宛も母親が始終赤子に付き添ふて居て如何なる時に  
 も如何なる事にも危険無き様保護し養育するが如く  
 釋迦牟尼世尊は我等の慈母として終始我等に隨ひ附  
 き添ひ我等を逐ひかけて教化し濟度せらるゝのであ  
 り、更に佛と我等との因縁は決して此の世だけで  
 終るものでない。元來佛の出現が過去世遠き昔より  
 の因縁に由來せるが如く、亦未來に於ても此の心靈  
 的血縁は彌々深くつながり行くもの、何時の世にあ  
 らうと、何處の世界にあらうと畢竟して我等は遂に  
 此の釋迦牟尼佛に濟度し化益せられたるものである

故之を「畢竟化の大神」と稱するのである。此の隨逐化と畢竟化の二大神は世尊の十大恩など、稱して佛恩を種々に數ふる中にも特に銘記して忘る可からざる所であらう。而て今述べたる佛と我等との久遠劫來三世永劫の大因縁は、是より以下更に次第に繰返せんとする所であり、前回にも時々觸れたるが如く、特に釋尊の根本的本體たる無始久遠よりの御覺と大悲の恩化即ち本覺の本佛たる事を顯す常住の妙化の一段に至つて燦として明かであるが、其等の深義に參入するの前、日蓮聖人の御遺文に於て、此の主師親三徳の大神教主たる我が釋迦牟尼佛世尊を如何に教へ示されたかを尋ねて見よう。

祈禱鈔に云く、  
佛は人天の主一切衆生の父母也而も開導の師也、父母なれども賤しき父母は主君の義を兼ねず、主君なれども父母ならねばおそろしき邊もあり、父母主君なれども師匠なる事はなし、諸佛は又世尊

にて御坐せば主君にて御坐せども、娑婆世界に出でさせ給はざれば師匠にあらす、又其中衆生悉是吾子とも名乗らせ給はず、釋迦佛獨り主師親の三義を兼給へり 南無妙法蓮華經(續)

彌重まさ子

奉祝繼宮殿下御降誕

せしのうちに今朝は春たつこゝちせり

日繼の御子のひかりあふれて

新年 雪

あらたまの年のはしめの初雪は

御代をことほくしるしなるらむ

左記上田理事長、佐藤中将お二方のお話は、昭和九年一月七日日本部に開盤の奉祝新年會に於ける御口述の要旨であります。

挨拶

理事長 上田辰卯

新しい年を迎へまして御同様に洵にお目出たいと思ひます。殊に本年は、日本國中が上下擧げてお待ち申上げたところの皇太子殿下の御誕生を昨年末に拜しまして、平常の年と異なりまして又別な意味でのお目出たい新年を迎へることが出来まして、洵に國民として光榮幸福之に過ぎるものは無いのであります。皇太子殿下の御誕生は皇室の御繁榮は申すまでもない事でありますが、又吾々國民が目下非常時に際會致しまして、一層の奮闘と努力を促すところの一つの大きな意義を吾々は考へなければならぬのであります。

滿洲事變が起りました以來、今まで比較的平和を夢みて居りました日本に、遽に非常時といふ聲が高く叫ばれるやうになりました。又昨年になつては、此の所謂非常時なるものが愈々拍車を掛けまして、國內の經濟的、財政的には申すに及ばず、國際的に可なり危険の状態を吾々は見て來たのであります。陸海軍の所謂軍事に關しましては、後刻來賓からお話を承ることが出来ると思ふのであります。

経済的に又財政的に、如何に吾々が恐ろしい非常時を昨年経験したかといふことを、新たな年を迎へるに方りまして回顧して見るのも、決して無駄ではないと思ふのであります。

一昨年の秋、滿洲事變に關聯して起りましたところの國際聯盟の問題、是がチヨウド昨年の一月が愈々最後の解決を與へられる時となつて居りました、吾々經濟方面に關與して居る者は、其成行を非常な注意を以て視て居つたのであります。當初一月の初めに於きましては、聯盟の事務總長と日本の杉村氏との間に密約が成立したといふ話がありました、恐らく是が聯盟の危機を脱する一つの動機となるだらうといふことを、可なり多くの期待を以て吾々は觀て居つたのであります。ところが洵に面白くない情報報が英國に流布されたとかで終に其密約は成立するに至らずして、あの松岡全權の聯盟脱退の宣言となつたのであります。

聯盟の脱退といふことは、いろいろ喧しく論議されましたので、私よりも皆様の方がよく御承知だらうと思ひますが、其國際的關係以外に、是が必らず日本の經濟的致命傷となるだらう、財政の危機を生む大きな原因となるだらうといふことは、早くも考へられたのであります。それは、兎に角國際聯盟といふことで成立して居りますところの一切の經濟條約といふものが當然破棄されるであらう。又我日本は列國との交渉無しにはなか／＼存立することが困難である。御承知の通り粗製品、原料品を海外から仰いで、之に加工して輸出するといふことが日本の唯一の經濟政策となつて居りますので一たび經濟條

約といふものが破棄されれば、當然輸入さるべきところの原料品に向つて可なり困難を感ずるだらう、更にそれよりも之を加工して輸出する方面に至つては、どれ程の壓迫を受けるか判らぬだらう、更に是が動機となつて日本の財政といふものが、唯さへ骨の折れるところに、唯さへ陸海軍の龐大なる豫算を脊負つて行かなければならぬ此の財政に重大なる壓力となつて、負ひ被さつてくるだらう。恐らく此の經濟的の壓迫が動機となつて、日本の財政は昨年の豫算編成期に向つて終に破滅を來すのではなからうかといふことは、昨年の聯盟脱退より延いて春頃多くの人が豫想した事であつたのであります。

其の豫想は始めは正に的中致しまして、先づ東洋に於ける蘭領諸國、英領諸國、佛領諸國といふやうな、日本の近海を繞つて居る所の屬領が、續々として日本の商品排斥する形勢が見えました。私も一面に其の仕事に携つて居りましたので、四月五月頃の形勢は、實に犬養總理大臣が狙撃されたあの當時よりも一層吾々は恐怖したのであります。チヨウド亞米利加がそれと相前後致しまして金の輸出禁止を致しました。亞米利加の輸出禁止といふことは格別大した問題でもなかつたといふ風に考へられた向もありませんが、實際に於ては是は大變大きな影響を日本に與へました。所謂爲替相場關係から、日本の圓の低落といふ事が唯一の經濟復興の條件となつて居つたのが、それが相殺されました、二十弗前後の圓が忽ちにして三十弗を超える、輸出は採算が合はないといふ状態を現出したのが、チヨウド五月六月の時分であつたのであります。此儘進んで行けば、恐らく聯盟脱退といふ事は日本の空威張に終つて

亞米利加始の歐洲諸國が密かに期待して居つた如く、日本は滿洲といふものと手を握つた儘立往生をす  
るのではなからうかと思はれたのであります。

ところが實に偶然——イヤ是が實際の因果の法則であるのか知りませぬが、吾々には恐らく偶然とし  
か考へられなかつたのは、此危険な經濟情勢が却て好い結果を齎しまして、危険と見られたところの  
輸出貿易といふものが非常な勢を以て促進されて來たのであります。何故さういふ状態になつたかとい  
ふと、チヨウド印度が關稅を引上げて日本の商品に向つて十割の課稅をするといふ事になりましたに就  
て最初に感ぜられたことは、日本が多年苦心努力して築き上げたところの印度市場を是で失ふのではな  
からうか、斯う思つて居つたのであります。世間は廣いもので、是が總て亞弗利加にも、南米にも、  
或は波斯にも、到る處に一體日本の商品はそんなに安いものだらうか、日本の商品はそんなに良い物だ  
らうか、今まで吾々は日本の品物と言へば唯粗製濫造で、耐久力が無くて外觀だけであつたと考へて居  
つたが、印度市場に於て英國品を驅逐して、英國が對抗が出来ない、斯ういふ商品である以上は相當良  
い物に違ひない、安くて良い物に違ひない、斯ういふ事が圖らずも印度の關稅引上に依つて世界中に宣  
傳をして呉れたやうな結果になつたのであります。そこで日本も大變氣が強くなりまして從來印度から  
買つて居りましたところの棉花は、報復的に買つてやるまい、斯ういふ決議を致しまして、所謂印棉不  
買同盟をやつたのであります。今迄は印度から輸入するところの棉花で、綿製品の粗布と言つて、東洋

の諸國へ行かうやうな下等な品物は、印度の棉花を大抵六割五分から七割使つて、あとの三割五分か三割  
が亞米利加の棉花を使つて製造して居りました。それを印度の棉花を買はないで、波斯なり埃及から棉  
花を買つて造る、其の代りに製造した物は其の方面で買つて貰ふ、斯ういふことになりました。曾て日  
本の重要工業の一つであつたところの綿絲工業が、印度の關稅引上で破綻になるのかと思つたところが  
一轉して却て生産率といふものが、印度市場を有つて居つた當時よりも殖えまして、輸出が増加すると  
いふ形勢になつたのであります。

人絹に於ても其の通りでありまして、やはり是も歐羅巴市場、或は東洋各市場で排斥されたのであ  
ります。是がやはり一面に於て新しい市場を開拓すると共に、他面に於ては製造業者自らが非常な努  
力を拂ひまして、如何なる關稅の障壁も乗越えて之を海外に輸出しなければ、自分の商賣が立行かない  
ばかりでなく、日本の國が倒れる、斯ういふ事を考へまして、非常な研究と努力を拂ふやうになつた。  
その結果一昨年あたり製造したところの人絹よりも數等品質の優れた物を、其の當時の半値位で以て製  
造するやうになつたのであります。昨年の十二月頃、帝國人絹、或は倉敷紡績といふやうな會社で製造  
した日本の人絹製品は、英國の或る會社、それは世界で最も優秀と謂はれた會社で製造した人絹製品よ  
りも遂に優れた物を造るやうになりました。さうしてそれが英國の市場で、向ふの製品が十二ペンスで  
賣られて居るものを、日本の其の優秀なる人絹は、之を船に積んで英國まで持つて行つて尙ほ僅に八ペ

ンス何がしといふ値段で賣ることが出来るやうになつたのであります。随つて英國では昨年(一九二一年)の十二月からは、殆ど總ての人絹會社といふものは、自分の所で製造するよりも、日本の商品を買つて自分の會社のマークを附けて賣出した方が餘程儲かる、斯ういふので續々と人絹の工場が閉鎖されて、それが爲に到る處で勞働争議が起る、斯ういふ状態になつて居るのであります。

聯盟脱退で非常な危険を吾々が感じたところのものが、此の人間の努力、日本國民の一致結束した努力に依つて、實に其の難關を打過ぎたばかりでなく、曾てさういふ事の無かつた以前よりもまして優良なる成績を擧げ得て、昨年の經濟界といふものは幕を閉じたのであります。

續いて豫想されましたところの財政の危機といふことも、殆ど是は事實杞憂に過ぎなかつた、又將來に於てもさうであらうと思ひますのは、兎角日本の財政といふものは、日本人が内地に於て考へると如何にも危なつかしいやうに思ふのであります。併し外國人は一體日本の財政をどう觀て居るかといふことを考へて見ると、一番よく解るだらうと思ふのであります。昨年或る米國の有力な人、是は名前を匿して居りましたから誰が言つた事か解りませぬが、恐らく日本の電力會社の債權關係の人だらうといふ推測であります。東京の帝國ホテルに滞在して、一般の財界の名士と極く内輪に會ひまして、日本の財政の問題に就て色々語つたさうであります。日本の二十一億といふ豫算は、大藏大臣が是れ以上やつたら日本は潰れると言つて頑張つて居られた、其の豫算を外國人はどう觀て居るか。其の時に述べら

れた話ださうであります。二十一億といふ豫算は、亞米利加の紐育市の豫算にも足りない。此豫算を以て世界第一の海軍と、世界第一の陸軍と、さうして世界第一の教育、それを負擔して居る、實に日本の國民といふものはどういふ風にしてさう金を有効に使ひ得るかといふ事にたゞモウ呆れるばかりであるといふ批評でありました。紐育市の豫算は、爲替相場の違ひがありまされども、日本の金に換算すると二十何億といふものさうであります。兎に角二十一億といふのは全日本の豫算である、それです。事實に於て世界第一の陸海軍を有つて居る、又教育機關にしても世界第一と誇り得るのである、それを兎に角賄つて居るのであります。斯ういふ譯で、日本人は比較的財政の頭腦がない爲でありませうか、二十一億といふ數字を聞いて驚いて居るけれども、之を見た外國人は、却て少な過ぎるのに驚いて居る。唯々日本人の財政的手腕といふものに付て徹頭徹尾敬服して居るといふ話でありました。是は吾々が豫算の内容を検討して財政的問題を考へるよりも、一外國人の此の批評の方が、もつと真相を穿つて居るものではなからうかと思ふのであります。

斯ういふ状態で非常時に際會して最も之を乗つ切るのに困難とされたところの經濟財政の兩方面が、偶然と言はうか、必然と言はうか、極めて安穩に、又極めて希望多く一年を過ぎし得たことは、實に吾々が昨年の劈頭に豫想した事が如何に間違つて居つたか、又如何に是は日本が好運であるか、又如何に國民の努力が力強いものであるかといふことを物語るものでなからうかと思ふのであります。恐らく本

年以降の日本の財政経済といふものに付ては、微塵の心配もなくして終り得るものではなからうかと私は考へます。

唯吾々が非常に虞れなければならぬ點は、恐らく我國は是で難關を脱して素晴らしい新興日本といふものが生れ出るだらうと私は信するのでありますが、幸にもさうなつた結果は一體どうなるか、恐らく日清戦争、日露戦争に勝つた時のやうな有頂天な、不遜な國民となり終るのではなからうか。世界を睥睨して世界第一の陸海軍を有ち、最強の經濟基礎を有ち、さうして地理的關係から言へば如何なる列強にも壓迫を受けない。是だけの事を考へたならば、恐らく日清日露の戦争の後の事を考へて見ても、極めて有頂天な、不遜な國民が生れ出はしないか。さうして其の結果はやはり何かの機會に於て再び蹉跌を來すのではなからうかと思ふのであります。それでありますから吾々が是から大いに注意すべき事は、現在の國民及び體て生るべきところの第二の國民といふものに、再び左様な有頂天な、不遜な氣持を起させないやうにするといふ點に在りはしないか。それには一體どうすれば宜いかと申しますれば、唯徒に内容の空虚な日本精神を振り廻すとか、或は抽象的な思想運動とかいふものでなくして、もつと内面的に、人間に思ひ切つた反省をさせるところの宗教運動でなければならぬと私は思ふのであります。

遺憾ながら此の宗教運動といふものが、今日殆ど進歩の見るべきものがありませぬ。殊に昨今のやうな所謂非常時といふことになりますと、目前の効果の擧げられないものは疎んぜられる傾向が非常に多いのであります。宗教運動といふものが實際に於ては必要であるにも拘らず、兎角に疎んぜられるのであります。斯ういふ時勢に於て吾々は非常な決心と、非常な努力とを以て、此時機に際會して最も必要なことは宗教運動であるといふことをよく國民に徹底させ、さうして吾々の奉ずる所の優れたる宗教を國民に會得させる義務があるだらうと思ふのであります。此點に付きまして本年は皆さんと共に一層の努力を捧げたいと思ふのであります。之を以て私の新年の御挨拶に代へます。(拍手)

### 所 感

海軍中將 佐藤鐵太郎

只今非常に意義の深いお話を承りまして、至極御同感であります。洵に日本は運の好い國で、日本を創られました神様の思召し。又日本が世界に存在して居る意義といふことから考へて見ますれば、無論日本といふ國はどこ迄も安泰でなければならぬと

でも、先刻磯部さんから皇道といふ事の意味を徹底したいといふやうなお話もありましたから、之に就て私が平素考へて居ります事を露骨に申上げて見たいと存じます。

其の前にチョット申上げて置きたいことは、只今理事長のお話の中にもありました。皇太子殿下がお生れ遊ばしたといふ其の事でありませぬ。此の御慶事に就きまして、どうして日本はこんなに都合好く——と言つては恐れ多い事でございませぬけれども、有難い境遇に近づきつゝあるであらうか、これは人間業ではないといふことは、誰しも頭腦に浮んだことで、皆様も無論さうであられるだらうと存じますあの時の私の感想を申上げて見たい。

皇太子殿下がお生れ遊ばしたといふことが、私の耳に入りましたのは、田舎に住んで居る爲でもありませうか、四十分程遅れまして、朝の七時二十分頃でありましたらう、實は寝坊をして居りました。其

これは少し理窟つばいやうでありますけれども、私は體驗があるのであります。よく宗教上の事に就て自分の體驗をお話する時にこのお話を致すのでありますけれども、日露戦争の直後、私が小さい艦の艦長となりました際に、露西亞界に近き雄基灣よりの歸途日本海の北方で吹雪に閉込められて二進も三進も行かなくなつた事があります。其の時に、自分はまだ法華經の固い信仰もありませんでしたけれども、友人から贈つて呉れた法華經を持つて居りまして、それを讀んで居りましたので、斯ういふ時に親音様の御利益を……と思つて、普門品を經橋の上で讀誦致しました。人に見られては極りが悪いといふやうな氣持で、海圖臺の覆を被り人に隠れて拜讀しまして、普門品の偈を讀み終つて、ヒョット頭を上げて見ると驚きました。チョウド右舷の方に當りまして三哩クライ離れた所に舞水端といふ朝鮮の東海岸の尖端が見えた。是は見える筈などはありません

の時に私の娘婿が駈けて來まして、「皇子様がお生れになりました」と言つて報せて來ました。私は「何ッ」と言つたさき其處に立上つて、思はず駆け廻りました。同時に、妙なことを申上げるやうですが涙が出て來てたまらない「ア、有難い〜」と言つて、人が見たら狂氣と思はれるかも知らんほど、端下ない態度が自ら出て來まして、自分ながら止めることが出來なかつたのであります。それから先づ何よりもと思ひまして參内致しまして、參賀のことをお帳面に記いて退りました。それから大宮御所へ伺ひまして是れ亦お帳面に記きました。實に嬉しくてたまらない、斯ういふ時こそ明治神宮に參拜しやうと思ひましたから、明治神宮に參拜致しました。無論正式の參拜といふ次第ではありませんから、他の人々と共に外から拜をしました。さうして明治天皇様にお禮を申上げました。其の時に何とも言へない感じを起したのであります。

非常に吹雪で、五十米クライ離れた所が何にも見えない、自分の艦の軍艦旗すら見えない有様でありましたから、とても見える筈はないのですけれども、それが瞬間にパツと自分の眼に見えた。思はず「ア、有難い」と叫びました、それで始めて元山に向ふ針路を定める事が出來ました。早速航海長に申付けて針路を定めさせた、ところが航海長は「此處で針路をさめて宜しいのですか」と言ふ。「宜しい、今舞水の端が見えたから……」航海長は驚いて「そんな遠方が見える筈がありません、此の吹雪の中で……」「イヤ俺は確に見たから大丈夫だ、其の通りやるが宜い」と言つて針路を變へさせまして、それから自分の部屋に歸つて「ア、實に嬉しかつた、こんな事も有るものかナ」と思ひました。見える筈がないものが私には確に見えた、「まあ是で安心だ」と思つて、實はソファの上に寝轉びました。其の時にフト思ひ浮びましたのは「ア、是では濟せん、人にも

のを頼んで置いて寝轉ぶとは何事だ、まして神佛の御加護を願ふて此有様は何事だ、人が親切にして呉れたのを宜い氣にして寝轉ぶとは何事だ、是は自分の人力を盡して當らなければならん、さう思つて起き上つて椅子に腰を掛けて、腕を組んで考へましたところが自分が人力を盡すと言つても、ナニも此の場合盡しやうがない、どうしたら宜いだらう、色々考へたが何にも無い。タツタ一つある、それは何かと言ふと今の速力で行けば明日の朝八時頃に元山沖に着く豫定であるが、それは一月の末のことでありますから、八時といつたら夜が明けて直ぐです、「何があつてもこれを處理する時間がない」「これは少し危ない、一時間だけ延ばさう、是より以外に人力の盡しやうがないから……」と考へて、それから元山に着く時間を一時間延ばすやうに速力を緩めさせました。

翌日の朝吹雪の中を元山に近づいた譯であります

「届きません」と言ふ。「是はいかん」と言ふので急いで艦の後退を命じまして、舵を取つて其の場で小さく艦を廻しまして、もとの二十尋の深さの所まで歸つて碇を投じました。相變らず風はひどいので艦はしきりに動揺しますけれど仕方がないから其儘にして居りました。ところが暫らく経つて吹雪が納まつて來た、見ると驚きました、何時の間にか艦は潮に流されて虎島の所に來て居るのです。若しも一時間延ばさなかつたならば、夜が ажけるや否やモウ五十分クライ前に自分の艦は暗礁に乗り上げて居つたに違ひない。小さい艦でありますし、其の邊は四十尋五十尋の深さであります、とても助かりやうはなかつたのであります。それは思はずツと致しました。其の時の事を私はよく覺へて居ります。始終自分の頭腦から離れない。それで神佛の御加護といふことを考へると、すぐ其の事が頭腦に浮んで來るのであります。

が眼が覺めて見ますどうねりの間隔が小さい、さうして規則立つて居ります、それで何だか海岸に近いといふことが感ぜられたのですが、是は何處かトンでもない所に來て居りはせんかと思つて、海の深さを計らせました。ところが二十尋だと言ひます。二十尋ならチョウド好い、元山の入口だと思ひながら何氣なく海圖を見ました。ところが私も兼て知つて居る通り、虎島といふ半島に近づくと、二十尋クライから又深くなつて四十尋でも足らなくなる。其處へ入つたら最後で、暗礁が一バイある、それが心配でありましたから、まさかと思ひましたけれども絶えず深さを計らせながら氣を付けて進んで行きました。兵が測鉛線を投げて深さを計つて居ります、それが突然「艦長届きません」と言ふ、普通二十尋造しか計れない、それが届かないと言ひますから、「それははいかん、すぐ繋いで計れ、それから速力を緩めさせまして、二本繋いでやつたけれども、艦長

妙なことを長く申し上げましたが、此の間も明治神宮の前でお禮を申し上げました時に、「ア、有難い、日本は是で大丈夫だ」といふやうな心持でお禮を申し上げました。ところが其の時にヒョット考へた「ア、洵に有難い、天佑である、實に何んとも言へない有難い事であるが、之をたゞ有難いと言つて萬歳を唱へるだけで済むだらうか、斯ういふ時に人力の限りを盡さなければならん」斯う思ひますと、吾々の責任は非常に重く感じた。どうして今日の苦境を日本が凌いで行かうか。無論最後に於ては日本の運命といふことに對しては、私は樂觀主義ではありますけれども、ウツカリして行くことは出來ぬ、どうしたら宜いかと思ふと、自分の御奉公をするに付ての途にチョット迷ひまして、頭に不安を感じました。又同時に涙が出て參りました。爾來毎日々々其の事を考へて居つたのでありますけれども、殿下のお名前を拜しまして、頭腦の中の刺戟が少しづつ、自分に自



信といふものが付くやうになりまして、今日は幾らか楽なやうな気分が致します。私は本當に思ひます。是から後の吾々は責任が實に重い、今日のやうに唯萬歳々々と言つて騒ぐのみで朝から晩まで享樂気分を以て、酒などを飲んで騒ぐ、酒を飲むのが必ずしも悪いとは言はんけれども、唯騒いで、甚だしきに至つては東京音頭を踊つて踊り狂ふといふやうな事では濟まんではないか。私はさういふことを頭腦に痛切に感じて居ります。餘程是は所謂禪を緊めて掛らなければならぬ時になつたといふ感じに満ち充ちて居ります。私は兎に角命のあらん限り、此の世界に二つと無い大切な皇國の御國體を擁護申上げて皆様と御一緒に、同胞の人々と共に進みたいと考へて居ります。

其の私が懸命でお護り申上げたいといふのが、所謂皇道であります。皇道といふ言葉は此の頃みやみに流行つて居りますが、一體皇道とは何だ。陛下が

お読み遊ばすから皇道である、吾々日本人たる者の道は疑ひもなく臣道でなければならぬ。今はむやみに皇道々々と言ふが、果してよく眞の意味が解つて居るか。日本の臣民たる吾々の盡すべきものは皇道にあらすして臣道である。併し皇道が解らなくては、臣道は履めません。そこで皇道といふのはどういふものかといふことに付て、自分の信じて居る事を簡単に申上げて見たいのであります。

私は、理想的國家といふものはどういふものかといふことに付ては、實は生意氣ながら相當久しい間研究して居ります。先づ一番近い所で儒教が私の頭腦に浮びますから——それは信仰ではありませんが、唯いろ／＼の事を考へる時に儒教が私の頭腦に響きますから、儒教を調べ見ると、是は御承知の通り書經に書いてあることで明瞭であります。それは國といふことを言ふよりも、國を治める當事者がどういふ風であるべきかといふことを論じて居る。書經

に堯舜禹湯文武といふやうな人々を擧げてある。孔子様は是はみな聖人だと言はれて居るが、私は生意氣を言ふかも知れませんが、あれを聖人などとは考へません。あれが聖人ならば誰だつて聖人だといふ考へを起します。堯舜もさうです、禹湯文武、決してあれは聖人ではない、逆臣です。日本人から考へると逆臣です。併し世を安んじたことだけは確であります、其の點に立派な人であつたと言へます。併しあの時代を觀ますと、「亶に聰明なるは元后と作る」といふあの意味で一貫して居る、利巧な人が國を治めるのだ、聰明な人が王と成るのだ、智慧が有り、學問が有り、相當の力の有る人、それが王となるのだといふことに歸着して居る。堯舜禹湯文武みなさうです。それからだん／＼後になつて孔子様などの仰つしやるところ其の他を見ますと、徳有る者が王となるといふ、有徳作王主義です。唯聰明だけではいけない、徳の有る者が王になるのだとい

ふことを言ひ出ししました。孔子様の説くのはやはり徳の有る者が王となるといふことであります。支那に革命が絶えぬのも其の意味でありませう。徳の無い者は王として居ることが出来ない、徳の有る者が王となるのですから、交代するのは當然です。併し孔子様は是でもまだ本當に安心しないものであるから、自分の憧れとして、春秋といふ本を見ますと、萬世一系論を頭腦の中に描いて、それを仄めかして居るやうであります。併し是とても本當の説として尊敬するだけのことではなからうと思ひます。秦の始皇帝が之に真似て、自分が第一代の皇帝になつて萬世一系を始めるつもりであんな事をやつたのでありませう。けれども出身が知れて居ります。到底そんなことで永續するものではない。即ち支那では王道といふことは説きまじ、王としての道は説きまじけれども、その王道は王たるに足る力の有る者が王といふことを借稱しつゝ、進んで來たのでありまして

所謂新道であります。それで支那は一貫して居ります。決して王道とか皇道とかいふ資格はありません。そんな事を言ふ頭腦もありません。

それなら西洋はどうだと言ひますと、西洋は無論力の有る者、力の強い者がドン／＼弱者を叩きつけて王様になつて来たので、何にも味ひが無いやうに思ひます。併ながら希臘のプラトンとアリストートルといふ二人の人が理想的國家に就て述べて居ります。是がチヨウド今の支那の考へ方と一致して居るから面白い。プラトンの説は聰明といふ説のやうです、アリストートルの説は徳の有る者が王となるといふ説であります。それ位しか無い。それ以來立派な説といふものは西洋には一つもありません、要するに霸道で終りました。

ところが願ひて吾々の最もお慕ひ申して居る、又尊敬して居りますところのお釋迦様は、法華經に於て本當の王様の道をお説き下さいました。それは何

ぎ、統治者として仰ぐだけの資格がないといふことを斷言されたのがお釋迦様であります。唯だ我一人のみ能く救護を爲す。是はもう千年経つても萬年経つても易らない事でありませう。其のお釋迦様の教を最も現實に合せてお説き下さつたのが日蓮聖人様であるといふことは、今更申上げるまでもないことでもあります。

かといふと、皆様も御承知の通り譬喩品の今此三界の文であります。

今此の三界は皆是れ我が有なり。其の中の衆生は悉く是れ我が子なり。而も今此の處は諸の患難多し。唯だ我一人のみ能く救護を爲す。此の「唯だ我一人」といふことが問題です。唯だ我一人とは何であるか、壽量品で顯れたところの如来様です。此の譬喩品と壽量品と寶塔品と、此の三つを頭腦の中に入れてよく考へて見ますと、始めてそこに顯現するものは何かと言へば、徳有る者が王となるといふやうなことではない、不生不滅でなければいかん。不生不滅の意義ある者が始めて今此三界の意味を全うしつゝ、王として立つことが出来るといふことを説いて下さつたのはお釋迦様だけです。不生不滅すなはち過去にも生せず、未來にも滅せず常住不滅、現今の言葉で言ふ金剛無缺、萬世不易、さういふ天子様でなければ、理想的の君主として仰

幾ら徳が高くても公平でなければいかん」と言つて居ります。如何ですか、今の各國の大統領を御覽なさい、如何に偉くとも自分の黨派を無視する譯には行かない、何の公平がありますか。今の各國の國王を御覽なさい、如何に偉くとも自分の王家を庇護して呉れる人を袖にしては一日も立つて居れません、即ち言ふ迄もなく王家を庇護する者に私するといふ考へが自然に潜んで居ります。何の公平がありますか。ところが萬世一系、どんな事が有つても滄らぬ、さういふ自信の上に國民も立つて居り、天皇陛下御自身も其のお心持を以てお立ちになる場合に何の不公平がありますか。何の不公平な處置をする必要がありませうか。是は實に公平といふ一語を以てスタイン先生は日本の國體を説明せられたのであります。

スタイン先生は公平と言はれた。お釋迦様は常住不滅と言はれた。即ちお釋迦様は存在の意味を仰し

やつた。スタイン先生は公平といふことを本にして變らないといふ其の結果を言はれた。其の言葉に若干の違ひはありまされども、趣意は同じであります。これが即ち皇道です。徳が高い者がどうか、そんなことが皇道ではない、萬世一系變らないところの皇統を戴いて、お釋迦様の言はれるところの「唯我一人」、スタイン先生の言はれるところの「公平」の意味を貫徹したものでなければ皇道の國とは言はれますまい。さういふ國は世界の何處にも無い、日本唯一つです。それを護るのが吾々日本人の臣道です。此の頃西洋人がだん／＼日本に憧れて來るといふのも無理はないと存じます。本當に人間が理想的の國家といふことを考へて來れば、どうしてもそこに歸着して來なければならぬ。確に此の頃は日本が世界の憧れとなりつゝあるのであります。

此の場合に吾々は自ら顧みて羞かしくしないでせうか、よほど反省しなければならぬと思ひます。固よ

方面の人が私等に話して呉れたことがある。今日は英吉利の工場の煙が薄くなつたといふことが事實でありませう。最近歸つて來た者の話などを聞きましても、ランカシャの有名な英吉利の紡績工業の地帯の状況はまるで上つたりだと言つて居ります。此の頃或る新聞を見ましたところが驚かされた。先刻も價の事をお話になりましたが、一番驚くのは硝子です。向ふの品物と品質は同じで、價が三分の一くらいださうです。殊に甚しいのは自轉車です、上等の自轉車が向ふで二十七磅するものが、日本から其の品物を送れば五磅で買へるさうです。到底日本品と競争が出来ない。人絹の事に就ても、今日世界の最も進んで居る國の一つとして伊太利があるのに、其の伊太利が此の頃は日本の品物に壓迫されて大騒ぎをして居る。特に嬉しく感じますのは、あの精密な器械を使ひますところの時計であります。今まではスイツツルの時計といふ物が世界の優良品で

り日本人は本當に國を思ふの情がある、陛下に對して御奉公申上げるといふ考はドンな人でも有つて居ります。さうして一朝事ある時にはデツとして居られないといふ氣持になるのであります。さりとして餘り一生懸命になつてもまた永く續きませんから、それにはどうしても落着いて心の中に正しい考を有つことを教へて下さつた日蓮聖人の教を吾々がよくお守り申上げて、強い志を以て進まなければならぬと思ひます。

物質文明の方面の事に付きましては、先刻もお話がありまして吾々實に有難く思ひました。實際其の通りであるといふことは私も豫て聞かされて居りました。實に驚くべき日本の進歩である。先刻もお話がありましたが、私も、紡績業などに付ての進歩は、モウ一昨年グライから其の趨勢が明になつて居つた、今に英吉利のランカシャなどは煙が立たなくなるだらうといふことを、一昨年あたりから其の

あれ以上の物は無いとされて居つたにも拘らず、此の頃はスイツツルでも大騒ぎをして、「日本の製品には到底敵はん」と言つて居る。どうしてこんなに進歩したか。私は明治二十七八年の戦争の後の、三國干渉の時を想ひ起します。あの時の日本の進歩といふものは驚くべきものであつた。それよりも尙ほ今日は工業上の進歩は盛んであるかの如く考へる次第でありませう、是は抑々どういふ事が原因であるかといふことに就て、先頃も或る人が申して居りました。

それは日本人の本當の素質が今日現はれて來たのだといふ、それは何かといふと第一に日本人の頭腦のよいことは確かでありませう。其の次は手先の器用なこと。其の次は腰の強いことである。此の三つが、工業上日本が世界の王者となるといふ、疑のない素質であると言ふ、成る程日本人が頭腦がよいといふことは、これは申すまでもありません。それ

から手先の器用な事では西洋人はどうしても敵はないといふことは、濱松の形染會社で、説明を聞きましたが、詳しいことは申し上げません、結論だけ申し上げますと手先の器用な點では、西洋人が幾らやつても、あの染める型を作ることが出来ないさうです。是は日本人が平素箸といふものを使ふから、手先が非常に器用になるのだと言ふことであります。それからモウ一つは腰が強いといふこと、是は何が原因かといふと、大笑ひをしたのでありますが、吾々の先輩の話であります。日本人が何故腰が強いかといふと一つは坐ること、モウ一つは雪隠の關係ださうです。日本人はしやがんで用を達す、あれが西洋人には出来ません。亞米利加のカリフォルニアからシヤトル、タコマ、ロサンゼルス、あの近邊に澤山日本の農民が行つて居りますが、亞米利加の農民はみな言ふて居ります。『どうしても日本人には敵はない』、それは農業に従事する爲にはしやがむといふことが

餘程必要であります。其のしやがむことが西洋人にはよく出来ない。其の點で日本人は非常に腰が強い。さうして見ると日本人は雪隠を廢してはいかんと云つて笑つたことであります。此の頃西洋料理などが流行つて居りますけれども、やはり日本人は箸を使ふのが宜しい。私が西洋に居りました時に、箸を使ひますと非常に西洋人が不思議にする、一緒に居つた家の人々がやつて見るけれども、誰も使へない。タツタ一人其家の主人の姪か何か箸を使へるそれは聞いて見ると看護婦をやつて居つて、平生ビンセットを使つて居る、其の關係で其の女の人だけが日本の箸をどうやら使ふことが出来る。さういふ譯で日本の箸といふものは必要である、日本人は和食を廢めてはいけません、それから雪隠にしやがむ事もやはり必要であります。さういふ風に考へて見ますと、成る程日本人は本當に素質があるのであります。

それから又物質文明といふものは譯も無いものです。精神文明といふものは非常に修養し悪いものである。申上げる迄もありませんが、何千年此の人間がどれだけ進歩したか、何百年前に比べて精神文明に於ては今日殆ど進歩の跡を見て居らなくてはなりません。ところが五十年、六十年前の物質文明を見て御覽なさい、まるで隔世の感がある。是クライ物質文明の進歩といふものは樂なものです。ところが其の難かしいところの精神文明が何よりも大事であります。其の精神文明に於て、どうして日本人が斯ういふ風に偉くなつたかといふと、それは一遍も外國から滅ばされた事が無いといふことが何よりの原因であります。外國のやうに強い奴が来て征服して、無理やりに今迄の思想を破壊してしまふといふやうな事がない。西洋は何遍もそれをやつて居る、支那などは殊にさうです、モウ根こそぎ前のものを覆滅すやうにひどい目に遭つて居る、日本は

さういふ事が一度も無い、國が亡びたことがない。暢びした姿で外國から物を取入れて来た、時にそれが爲にハイカラになつて困るといふやうな弊害になつたこともありませんが、兎に角日本人が取入れるものは入るけれども、外から無理やりに頭ごなしにやられた事は無い。だから日本の精神文明といふものは、何千年此の方向同じ國の中でズツと養はれて来た。西洋とはまるで違ふ。此の日本の精神文明を、お釋迦様の佛教がたすけ、支那の儒教がたすけて、さうして日本人の本當の情操文明といふものを守立て、来たのであります。西洋は理智の文明、日本は情操の文明である。西洋人もだん／＼此の頃情操文明に憧れて来ましたから、世界は是から後必ず情操文明の世となりませう。其の意味に於て日本の文明が世界の王であり、日本の文明に依つて本當に人類の幸福を進めることが出来るといふことも確に言ひ得るだらうと思ひます。

斯ういふ大きな日本の國の運命を吾々が考へて、それを樂しみとして行かなければならぬ。併しそこに達するまでは餘りに樂天的に考へないで、此の通り日本は實に有難い神様、佛様の御眷顧を蒙つて居る國である、之を吾々が愈々全力を注いで擁護つて行かなければならぬ、それには少し都合よく行つたからと言つて安心して寝轉ぶといふ事をしないでお互に人力を盡して一生懸命やらうではないかといふ覺悟を起さなければならぬと思ひます。私はよく色々の講演に申しますが、世の中が苦しいからと言つて、苦しくない所に行きたいといふやうな通げる心持は、斷然此の際いけません。又苦しいなんと言ふのは悟が開けて居ないからだ、苦しい事も苦しくないと思へば何でもないぢやないか、そこまで悟を開けといふ思想、是は一應尤もなことで、善い教でありませう、けれどもそんな事はよほど偉い人でなければ出来ません。吾々は苦しい時はやはり苦しい

そこを教へて下さつたのが日蓮聖人でありませう。日蓮聖人の教は、吾々は苦しい、苦しいがやるだけはやらう、斯う言ふのでありませう。苦をば苦とさとり樂をば樂とひらき、苦樂ともに思ひ合せて南無妙法蓮華經とうち唱へるさへ給へ、これに自受法樂にあらずや。と仰しやつて居る。さうしてたとひ頸をば鋸で切られやうとも、命の通はん程は退轉してはいかんといふ、あの意氣込を以て進むやうに、日蓮聖人様は吾々に教へて下さいました。此の心持を以て進みさへすれば、日本人は何もそんなに心配してビク／＼しないでも宜しい。世界第一の海軍國、世界第一の陸軍國が力を協せて東西から攻め掛つて來ても、今言ふやうな心持で進んで行けば、私は大丈夫日本の國は維持が出来ると思ひます。此の間の皇太子様のお生れ遊ばした事に就て、日本人が狂氣のやうになつて喜んだといふことは、

外國人が見て何と考へたのでありませうか。それは何と考へても宜しいが、確に驚いたに相違ない。日本人といふ者は實に一種特別な、何でも言へない心持に於て皇室に對する觀念があるといふ事だけは、どんな者でも解つたてでありませう。さうすれば、是は日本人に對しては尋常な事ではいかんぞといふことを、彼等はハツキリ考へたであらうと思ひます。此の頃國防々々と言つて騒いで居りますが、國防といふ點から見ても、此の間の皇太子様のお生れになつたといふ事實クライ効果のあつたことがありませうか、(拍手) 實に感泣の至りであります。まだ色々申し上げたいこともありますが、要するに吾々日蓮主義者一同は、是から後此の皇國を護るお旗本としてどこ迄も日本といふものを世界の仰ぐべき中心として進まうではないか。若し日本にまさかの事があつたら、世界に皇道といふ眞の公平なる政治を行ふべき機關が無くなるのである。吾々が日本

の國を護るのは、日本の爲のみではない、世界の人類に本當の理想的政治——と言つては少し小さいやうに思ひますが、理想的正道を行はせる爲に日本は在るのである。それ故に吾々は日本の國を護るのである。斯ういふ事の本當の意味を教へて下さつたのが、私共のお師匠様であります。申す迄もなく本多日生現下であります。吾々が現下をお慕ひ申して居るのは、吾々をして斯ういふ風な頭腦を開いて下さつた、少くとも、私が幾ら自分を最負眼に見ても、私の今の考の半分だけはどうしても現下からの賜ものであります。其の現下と最も御縁の深い此の會館で、斯ういふやうな遠慮の無い自分の考を申し上げることが出来たことは、私非常に愉快に存じます。これで 私は御免を蒙ります。(拍手)

# 法華經講話

(第二講)

文學士 小林 一郎

## 目次

最も勝れた法華經の漢譯 羅什の爲人と其の經歷 當時の支那と羅什の譯經 佛敎の興隆と天台大師 聖德太子の卓見 日本に於ける傳弘 法華經の目的 末の世のすがた まことの敎を求む 自分のためのをしへ 妙法蓮華經の字義 法とは何か 妙なる法 たとへば蓮華のごとし 敎をえらぶ順序

## 最も勝れた法華經の漢譯

前講には、法華經の成立に就いて一通りのお話を申し上げましたが、今日はこの法華經を翻譯した羅什といふ人の人物、その事蹟などを簡単に話してお話して置かうと思ひます。

前に申したやうに、法華經の原本といふものは印度には幾種もあつて、それが漢譯されたものだけでも六種もある。その中の三種は亡くなりましたたけれ

ども、三種は今も遺つて居る、その三種の漢譯された法華經を比べてみますと、これから御一緒に讀もうといふ「妙法蓮華經」が非常に勝れてゐる、その相異は少しぐらゐの相異ではない、非常に勝れてゐるのであります。たい惜しいことには、この妙法蓮華經の梵語の原本が浪びてしまつて今は亡いのであります。どうも日本と違つて他所の國は革命もあるし、又外國の侵略を受けたりいろ／＼な變化があるので、舊いものがうまく保存されない。これはまこ

とに惜しい事でありませんが、妙法蓮華經の原本は今無ないのであります。明治になりましたから、故南條文雄博士が梵語から法華經を日本文に翻譯されたことがあります、その時にはこの經の原本が無いのですから、「正法華經」といふもの、梵語の原本から日本語に譯して居られる。随分苦心されたやうでありましたが、しかし妙法蓮華經に比べると及ばないところが大分多いやうであります。英吉利のケルンといふ人が英吉利で法華經の英譯をした時には、梵語の原本に依らないで、吾々の讀んで居る漢譯の妙法蓮華經を本にして英譯をしました。それが今外國語に譯された法華經の中で一番よろしいのです。もとより西洋人がやつたことでありますから、東洋の事情などに通じない點もあつたりして、批評すればいろ／＼批評する點もありますが、とにかく現在西洋の語に譯されてゐる法華經としては、この漢譯の法華經を本にした英譯が一番よろしい、獨逸譯や

佛蘭西譯などもありますが、それに比べますと英譯のものがよろしいのであります。とにかく原本の無いのは惜しい事でありませうけれども、漢譯の妙法蓮華經が今日に遺つて居るといふことは實に有難い事でありまして、これは全く日本の國の存在したお蔭であります。若し支那の儘に放つて置いたならばどうなつたか判らないのであります、日本の國のあるお蔭で法華經が日本に傳はつて、さうして今日まで弘まつて居るのであります。此の事は實に私共佛敎を奉ずる者としては、限りなく尊い事に思はれるのであります。

さういふ由來のあるものでありますから、この妙法蓮華經を漢譯した羅什といふ人の人物などに就いて、一通りお話しして置きたいと思ひます。

## 羅什の爲人と其の經歷

これは普通には略してたゞ羅什と稱んで居ります

が、詳しくいへば鳩摩羅什といふのであります。この人が法華經を譯された年は、西洋紀元にして五世紀の初め、即ち耶蘇紀元四百五年頃であります。今から先づ千五百年以上経つたものです。前にも申したやうに、法華經の譯はモツと前にもありますけれども、とにかく随分舊いものです。千五百年以上経つた譯といふと、かなりの古文であります。

羅什といふ人は、龜茲といふ國に生れた人であります。龜茲といふのは中央亞細亞に屬する國で、天山山脈の南の方に位する一つの小さい王國でありました。今日ではさういふ國はありませんが、印度よりは東の方に寄つて居ります。この國は印度にも交通をし、又支那にも（漢の頃からせう）交通をして居つたやうであります。支那の書物には龜茲とも書いてあるし、むしろ屈支と書いてある方が多い、同じ國のことです。司馬遷の書いた『史記』にもこの名前が見えて居ります、此處はたいへん良い馬が

出た處だといふことで『屈産之乘』といふ語が史記の世家の中にあります、屈支で産れた乗もの、即ち馬といふことであります、そんな譯でこの國は舊くから名の知られた國であります。

羅什はその龜茲といふ國で生れたのであります。父親は鳩摩羅炎といひまして印度人であり、印度の相當に良い家柄の人であるらしい、それが龜茲の國へやつて参りまして、龜茲の國王に非常に信用されて、ほとんど國の賓客として待遇された。さうして佛敎の事などを教へて居ります間に一層ふかく信用された結果として、國王の妹の者婆といふ人を妻に娶りまして、この二人の間に生れたのが龜摩羅什であります、これは元來家柄からいつても立派な家柄の人であります。（ちよつと附加へて置きますが斯ういふ人の名前などの字は、印度の發音を支那の字に寫したので、この字の意味はないのです。それはよく承知して置いて戴かないと、これから後

も始終出て來ますが、字の意味はない、たゞ發音だけを寫したので、者婆といふからお婆さんだらうと思つてはいけない、お婆さんをお嫁にしたわけではないので、たゞ者婆といふ名前であり、羅什はさういふ名家に生れた人であり、天性非常に勝れた人であり、殊に母親が、羅什の非常に勝れた人物であるといふことに見込をつけて、七歳の時に母の奨めによつて出家して、佛敎を生涯の仕事とすることになりました。今日では、佛敎を専門にするといつたところが、大して尊い事でもないやうに世間では思つて居りますけれども、佛敎の全盛であつた當時には、出家して佛の道を弘めることに従事するといふことは、たいへん尊い神聖な事である、普通の人間では出來ない事と思はれて居つた。でありますから母親が、この子供はどうも立派な子供だ、斯ういふ子供に修行をさせたならば佛敎がひろく世に弘まるであらうといふ見込をつけ

まして、七歳の時に出家をさせました。いろいろお經などを學ばせますとよく覺えるし、又た覺えるばかりでなく、よくその意味を理解する、なか／＼七歳や八歳の子供のやうに思へない、恐るべき天才とも思はれる。そこで母親が考へた（この母親はなか／＼偉い人です）これをこの儘にして置く、折角の天才が賊はれるかも知れない、なぜならば母親は國王の妹である、父親も國王の信用を受けて國の賓客として待遇されて居るといふやうな偉い人であり、さういふ家に生れた子供は、動もすると世間の人間にむやみに煽てられて自惚れてしまふ虞がある。これは世間によくさういふ例があります。生れながらにして非常に勝れた天分を有つて居る者が、あまり周圍から褒めをやされて、どう／＼自惚れて馬鹿になつてしまつたといふやうなことは、よくある例であります。そこに氣がついた母親は、これはこの儘にして置く、危い、周圍中の人間が褒め

る者ばかり多い、子供心にあまり褒められ、ばツイ自惚れてしまつて、心が弛むかも知れない、さうなつた日には、折角の天分の勝れた子供が凡庸の人間に化する虞がある、これは國に居ない方がよいといふことを考へた。なか／＼偉い母親であります。

それから母親は羅什を伴れて自分の國を出まして河を渡つて北の方の罽賓といふ國に行つて滞在して居つた。これもあまり大きな國ではありません、龜茲より北の方に當る國で、そこに辛頭河といふ小さい河があつて、その河を境として兩國は相對して居つた。その罽賓に參りまして、此處で前の龜茲に於ける生活とは異つて著しい質素な生活をして、十三歳の時まで修行をしました。ところが何しろ非常に勝れた人でありますから、ズン／＼學問も進み、又行ひも立派な行ひの出来る前途有望な少年となりました。そこで十三歳の時に母親が伴れて故郷の龜茲に一度戻つて、それから更めて支度をしなほして

今度は身一つで印度に留學したのであります。いくら偉いといつたところがまだ十三歳の子供であります、それがタツタ一人で印度に留學することになりました。

それから羅什は印度の各地を歴巡つていろ／＼な學者に就いて教を受けまして、ます／＼學問も進み行ひに於ても人の模範となるやうな、立派な人物になつたのであります。羅什が印度に於て道を學んだ人は随分多くあつたやうであります、その中で殊に學徳ともに秀で、居つて、羅什もふかく敬服した人は、須犁耶蘇摩といふ人であつた（この犁の字も梨の字でもよい、印度の發音を漢字であらはずのすから、いろ／＼の字を書いて居ります）この人が殊に勝れた人であつて、また羅什の將來大いに見込のある人間であるといふことを見込んだと見えまして、非常に熱心に又親切に羅什に教へたのであります。それから大分久しく印度に留學をして、モウこ

れで十分だといふ見込が附いたので、須犁耶蘇摩といふ人が羅什に言ふには「お前は修行はモウこれでよろしい、これから一つ今まで學び得たところの佛教を世の中に弘めることに力を盡したらよからう」と申しまして、さうして昔は印刷などはありませんから、無論お經は一々寫すより外はないそこで、梵語で書いた澤山の佛教の經典を羅什に渡して、國へ歸れといふことを言ひつけた。その時に澤山のお經を羅什に渡した中に、妙法蓮華經の原本があつたのであります、それは今は亡くなつて居りますが、その時分には妙法蓮華經の梵語で書いた原本を殊に大切なものとして羅什に渡しまして、これは一番大事な經典である、この經典をお前の力を以て東の方に弘めろといふことを、特に言ひつけたといふことであらう。

その事は、法華經の漢譯が出来て後に、羅什の弟子が羅什から聞いたと見えまして、この法華經の漢譯される由來を詳しく書いて居るもの、中

に、今の須犁耶蘇摩が羅什に法華經の原本を渡した時の言葉を、次のやうに書いて居ります。

「佛日西に入つて、遺耀將に東に及ばんとす。此經典は緣、東北に有り。汝慎んで傳弘せよ。」

（佛日入西。遺耀將及東。此經典有緣於東北。汝慎傳弘。）

佛様は御入滅になつた、チヨウド日（西の空に没するやうに、佛様といふ太陽は西の方に行つて、モウ世の中に居らつしやらない、佛様は居らつしやらないけれども、佛様がお遣しになつた耀は、これからだん／＼東の方に向つてその耀が弘まつて行くやうに自分は思ふ。殊に今お前に渡すこの法華經といふ經典は、東北の方に緣が有つて弘まるものと思ふお前より外に人物はないから、お前は一生懸命になつてこの經典を東の方に傳へひろめよ、斯う言つて須犁耶蘇摩が羅什に法華經の原本を渡した。羅什は非常に感激して此の事を覚えて居つたと見えまして



これを弟子に話した、そこで法華經の漢譯が出来た時に、弟子がその顛末を記録して居ります。印度では習慣が日本と異ひまして、人を信するといふ時に頂を摩でる、日本では、大きな男が頭などを摩でられれば「ナンだ、子供ちやあるまいし、人を馬鹿にするナ」と言ふでせうけれども、印度では、お前を本當に信するといふ時に頭を摩でる、これは習慣です。それから人に本當に歸依したといふことを表はすために、體を床の上に横たへてその人の足の所に自分の頭を持つて行くのです。日本人が、お客様に來た時に床に横になど寝てしまへば、失敬千萬だと言つて怒るでせうけれども、國の習慣が異ふといふのは面白いものです。その時に須犁耶蘇摩が、片方の手に法華經を持ち、片方の手で羅什の頂を摩で、お前を信する、お前はきつと自分の志を果して呉れるだらうといつて、今の言葉を言つたと傳へられて居るのであります。

實は此の事は印度に於てはよほど前から、誰が考へ出したか知らんけれども、だん／＼に流布して行つた思想です。即ち佛教は東の方に弘まるといふこと、これはいろいろの書物の中に見えて居ります。最初は誰が言ひ出したか判りませんが、お釋迦様が御入滅になつた七八百年経つた後からは、何處とはなしに、印度には、佛教は東に弘まるといふ思想がありました。印度といふ所は國が統一されて居りませんで、小さい國がわかれて始終勢力を争つて居りました。かなり有力な國王が生まれても、その小さい國を纏めて一つの大きい國にするといふ事が難かしかつたらしい、それでいつでも國と國とが争つて、暫く平和であると又何か紛争が起るといふやうな状態であつたものですから、そこで心ある人は、どうもこれではいかん、何處か大きな、本當に平和な國にこの佛教が弘まらなければ、折角の尊い教も亡びる時が來はしないかといふことを案じたも

のと見えます。それで東の方に日本のあることなどは無論知らないのでありますけれども、支那といふ國は大國であつて、支那のあることは印度人も噂に傳へて聞いて居るものですから、それで東の方にはいろいろの國があるらしいから、その東の方へ弘めたならば佛教が混びないで遺るだらうといふことを誰が考へるともなく考へ出してそれが佛教東漸といふ佛の教が東にひろまるといふ、衆の間に流れて居る一つの大きい思想になつたらしいのであります。その思想が須犁耶蘇摩の言葉にもあらはれてゐる、東の方に縁がある、だからお前はこれを東の方に弘めろと言つたのであります。

羅什はその言葉を聞いて非常に感激して、自分の國へ歸つて行つたのであります。勿論日本といふ國のあることを知らず筈はないのですが、實に不思議な事でありませぬ。須犁耶蘇摩の言つたことが測らずもだん／＼現實になつて、今ではチヨウド印度から

東北にあたる日本にのみ、佛教が活きて遺つて居るといふことは、これは偶然ではないのであります。羅什はさういふ譯で國へ歸つて參りました。さうしてどうかしてこれを東の方に弘めよう、東の方といふのは、當時考へると支那より外に大きい國は無いのですから、支那に行つて佛教を弘めたいと考へて居りました。又支那から印度に經典を求めに行つた昔の話なども傳はつて居ります、支那に行けば支那は佛教に縁のある國だから、かならず佛教が弘まるだらう、自分の師匠から言ひつけられたこの大事な仕事を果すには、支那に行くより外はなからうと考へて居りました。しかし支那に行かうといつても、なか／＼さういふ機會がありません、今のやうに通の便もナニもありませんから、何かその機會がないかと待つて居りました。

當時の支那と羅什の譯經

その時分の支那は國が分立して居つて統一されて居らない、いろ／＼な國の對立して居つた時代であります。五胡十六國と申しまして、一時は五つも六つも、或は十以上の國が對立して居つた時代があつたといふ位でありましたが、その支那の對立して居るいろ／＼な國の中で、最も有力な國が秦といふ國でありました。これは秦の始皇帝の秦とは異ひます。名前は同じですが時代が全然異ひます。その秦の王様が符堅といふ人であり、これは符堅の建てた國でありますから、始皇帝の時代と區別するために符秦といつて居ります。この人はなかく豪傑であつたらしい。自分の部下の大將の呂光といふ者を遣はして、鳩摩羅什の國の龜茲國を討たせるといふ事が起つて來ました。もつとも符堅は佛教の事に熱心な人でありまして、誰から聞いたか、羅什の事も聞いて居つたと見えて、呂光に命じて「お前の今度討ちに行く龜茲といふ國には、羅什といふたいへ

ん偉い人が居るさうだ、その人に遭つたならば決して無禮を加へないで、その人を賓客として待遇して連れて戻れ」と言ひつけてやつたといふことです。けれどそれは後になつて判つた話で、その當時の事實として見れば、龜茲といふ國は支那から兵隊が征服に來たのですから、恐ろしい事でありました。その呂光といふ者が攻め込んで來たといふ事實に出會ひまして、羅什は、時流れりと思ひました。自分は支那に入つて佛教を弘めようと思つて居た、ところが支那から軍隊が攻めて來た、この時に支那の軍隊に自分の身を投じて、伴れられて支那に入れば佛教を弘めるといふ豫ての願望が達せられる、斯ういふ機會を逸しては再び來ないと思ひました。思つたと言ふと簡單ですけれども、これは實は懸命で敵の軍門に降るのですから、首をチョン斬られてしまへばそれきりの話です。「不惜身命」といふことを法華經を信する人が言ひますけれども、これこそ本

當の不惜身命です。生命が惜しいと思つて出來る事ではない、殺されよばそれ迄です。しかしながら敵の人間が情けのある者ならば自分を伴れて行つて呉れるであらうといふ、本當に命に懸けての話であります。羅什は呂光の陣に赴きまして自分の志を述べて「自分は支那に入つてこの大事な教を弘め、志がある者だからどうぞ國へ歸る時には伴れて戻つて呉れ」といふことを頼みました。呂光も豫て自分の御主人の符堅からその事は聞いて居りますから「あなたの時は主人からも聞いて居る、それは幸ひだから、自分の歸る時に一緒に行つたらよからう」といふ譯で、それから呂光は羅什を伴れて支那に歸ることにになりました。羅什は非常なよろこびで呂光に隨いて行つたのであります。

ところが世の中の事はなかく／＼と單純に運ばないもので、呂光が龜茲國を征服するといふ目的を達して支那に歸り着いた頃には、モウ本國には

内亂が起つて、符堅といふ人は自分の臣下のために殺されてしまつて、國が亡びました。さうして符堅に代つて今度は姚萇といふ人が王となりました、やはり國を秦と號けました。そこで前の時代の秦のことを符秦と申しまして、これから後の、羅什が法華經を譯す時代の秦のことを姚秦と申します。あなた方のお持ちになつて居る「妙法蓮華經」のはじめの方に

姚秦三藏法師鳩摩羅什 奉 詔 譯

と書いてありませう、その姚秦といふのは、姚萇といふ人が王になつた秦のことです。さてさうなると呂光はこれに服従するわけにいかない、主人の國が亡びても／＼同輩の者が王になつたからといつて、それに服従するわけにいかない、呂光は途中に留まつて、涼州といふところに獨立をいたしました。そこで伴れて來た羅什も涼州に引留められてしまつた。それで姚萇といふ王様は、しきりに羅什

を自分の方へよこせと言つて請求しましたけれども、呂光は肯かない。羅什は變な破目になつてしまつて、涼州に引留められて、前途どうなるか判らぬといふ状態でありました。

ところが姚萇が死んでその子の姚興といふ者が續いて王になりました時には、モウ此の國の勢力が非常に盛んになりました、呂光などはとても比べられないほど勢力が強くなつて來ました。呂光の方はだん／＼衰へて勢力が弱くなる、向ふはだん／＼強くなる、こんな事です。いつまでも衝突のはつたらぬと思つて諦めまして、呂光も姚興の下に屬することに成り、同時に羅什を姚興の方に送るといふことになりました。それで弘始元年といふ歳に、はじめて永間の願望が達せられました、羅什は支那の都の長安に來ることが出來たのであります。

斯くして羅什が長安に着いたのは弘始三年でありまして、さうして弘始十一年に羅什は死んで居りま

ます。

羅什といふ人は大體さういふやうな人でありまして、此の人の努力に依りまして、漸く完全な、私共が今日何度讀み返して見ても、見るたびに有難く思はれるやうな、立派な漢譯の法華經といふものが出來上つたのであります。

### 佛教の興隆と天台大師

羅什のことはそれだけにしまして、これから後だん／＼支那は南北朝時代といふのを経て、さうして南の方から起つた隋といふ國が南北を統一しました。隋の前の陳といふ時代には、これは一番有力な國ではあつたけれども、まだ南北が統一されて居なかつた。陳に續いて起つた隋の時に、南北を統一して支那がはじめて一つの國になりました。それから隋に次いで唐となるのであります。この陳、隋、

すから、足掛け九年、まる八年足らず長安に居つたわけでありませう。其の間に、出來るだけ梵語で書かれた佛教の經典を漢譯することに力を盡しました。その漢譯の仕方は、前にお話したやうに、自分が漢文で書いたのではない、自分が梵語の原本を執つて説明をして、それを大勢の學者が集まつて漢文に書いたものであります。その漢譯に力を盡しまして澤山の漢譯をして居ります。羅什の漢譯といふものは七十四部、三百八十餘卷と傳へられて居ります。九年間に七十四種のお經を翻譯したといふのですから、随分やつたものです。而もたゞサツサと自分で書いたのではない、大勢の人を集めて説明をして漢譯文を作らして、それを一つ／＼討論して、モウこれならば間違ひないときまつてから世に公にするのですから、容易な事ではない、本當にたいへんな仕事であります。その中に於て羅什の最も力を注いだのが「妙法蓮華經」であるといふことが傳へられて居り

唐の間に於て、佛教といふものが非常にさかんになりました。これは、佛教そのものが勝れた教であるからひろく弘まつたのであるし、又さういふ國の國王が代々あたまの良い人で、よく佛教に歸依してこれを弘めることに随分と力を盡しました。さういふいろ／＼な事情からして、陳、隋を経た唐代に於つて、佛教が非常に隆盛になつたのであります。ところが日本は、隋、唐の時代に於て支那との交通が頻繁でありましたから、その間に佛教が日本にえらい勢で弘まつたのであります。もつとも其の前から朝鮮を経て日本に傳はつては居つたけれども、チヨウド向ふが國の統一された時代、そして佛教の隆んな時代、その時に日本が頻繁に交通したのでありますから、佛教が日本に弘まつたのは自然の成行であります。これも今日から考へて見るとまことに有難い事であつたのであります。

その陳の末から隋の時代にかけて、支那に天台大

師といふ人が出現されて、法華經を弘めることに全力を注がれました。天台大師の出られる前には、法華經が勝れた經典だといふことは、誰も知つて居つたけれども、法華經が最も勝れた經典だといふことを見きよめた人はなかつたのであります。これは人情としてさう思へるのです、お釋迦様が法華經をお説きになつた後に、「涅槃經」といふものをお説きになつた、涅槃經は釋尊が最後に説かれた經典であります、これは分量に於ては法華經に數倍する大きなものであつて、非常に精しい。ですから普通の考でみますと、涅槃經が一番最後にお説きになつたお經であるから、この時に一切の事をスツカリ打明けて説かれたものだらうと思はれる。又お經の分量に於ても、法華經よりは非常に精しいのですから、この點から見ても涅槃經の方が法華經よりモツと精しく、モツと漏れる所なく御自分の考を打明けられたものであらう、と思ふのは人情であります。

鳥も落すやうな勢力でありました。その金陵の都の榮華の生活を捨て、天台山といふ山に入つてしまつた。それは何故であるかといふと、天台大師はモウ一際研究しなければ佛敎の本當の意味が解らぬ、こんな所で多くの人に歸依されて、世の中でワイワイと騒がれて、これで死んでしまへばそれまでの話だが、どうも自分には今までの研究だけではまだ十分でない、モウ一段ふかく研究して、お釋迦様の御本意が何處に在るかといふことを見究めなければ、折角敎を弘める甲斐はない、といふ決心を起された。さうして得意の絶頂に在つた金陵の都を捨て、天台といふ山に入つて、非常に困苦に堪へて研究をされたのであります。これはなか／＼普通の人間では出来ない事です、大概は、感ずる所あつて、世の中を捨てるナンといふ人は、ナニか非常な打撃を受けた時とか、失意の境遇に陥つた時にやるのであります、非常に得意の境遇に在る時に、感ずる所あつ

す。でありますから天台大師の出られる前までは、一切の經の中で涅槃經が一番勝れて居る、お釋迦様の御本意を打明けられたものはこれより外ない、といふ風に考へられて居つたのであります。日本に傳はつた佛敎も、やはりその意味で傳はつて居つた。これは少し後で申上げる事に縁があるから御注意までにお話して置きますが、支那でも、涅槃經が一番勝れて居つて、法華經はそれよりや、劣つたものと思つて居つたし、日本でも一般には佛敎を研究する人は、やはり支那の思想の影響を受けまして、涅槃經が第一である、法華經などはそれに及ばぬものだと思つて居つたのであります。

ところが天台大師といふ人が出られた。天台大師の事蹟などは他日に譲つて、極くザツと申し上げます金陵の都(今の南京)が、當時支那の一番繁昌した今の日本の東京のやうな所でありました、そこで國王や貴族や富豪の歸依を得て、天台大師は實に飛んで世を捨てるといふやうな事は、容易に出来るものではない、その點からいつてもよほど非凡な人といはなければならぬ。さうして天台の山の中に入りました、さうするとモウ今までのやうに、いろ／＼な物を持つて來て呉れる人はないから、非常に困つて、或る時は食べる物がなくて、椽の木といふ木の實を拾つてそれを團子にして漸く飢を凌いだといふやうな、えらい目にも遣はれましたが、そこで研究に研究を重ねた結果、はじめて法華經第一だ、何と言つても釋尊の魂を打込んで説かれた、佛の眞實の心持が遺憾なく顯はされて居るのは法華經より外ないといふことを突止められて、さうして天台の山を出て再び世の中に戻つて來て、法華經を中心として佛敎を弘めました。これが佛敎のさかんに世の中に流布するはじめてであります。

聖徳太子の卓見

其の天台大師の書かれた著述といふものはいろいろありまされども、その著述は日本には容易に傳はつて來ません。今日ならば何でもありません、出版が自由でありますから、英吉利で今年の正月頃に出來た書物は、今年の三月か四月になれば日本へ來ますけれども、昔は出版はなか／＼不自由でありましたから、書物が出來ても他所の國に傳はるのは容易な事ではありません。天台大師は、法華經を中心にして佛敎を解釋して、その自分の考を述べた立派な書物を作られましたけれども、その書物は日本にはなか／＼傳はりませんでした。チヨウド隋の時代が、日本では聖徳太子の攝政の時代でありましたが、その頃に支那から傳はつた書物は前の時代の陳、すなはち涅槃經を中心として佛敎を解釋した、その意味合で書かれた書物が傳はつて來て居る、お經も傳はれば、經に就ての註釋なども傳はつて居ります。しかしながら、法華經が最も勝れた經だといふこと

嬉しくてたまらないのです、眞實の事といふものは一種しかない、ナニも他人の眞似をしないで宜い。天台大師は天台大師で、みづから研究して法華經を中心して佛敎を解釋しようとした、聖徳太子は聖徳太子で、天台の書物などは御覧にならない、天台大師ナンといふ人の居ることも御存じないで、御自分の信念、御自分の考で（當時日本に傳はつた經典を讀まれて、その中から法華經が最も勝れたものだといふことを見出されたといふことは、これは實に有難い事でありませう。さういふやうな譯で、この佛敎の弘まる大きな潮流の内に於て、法華經といふものが支那にも弘まり、日本にも弘まる機運が啓けたのであります。

### 日本に於ける傳弘

それから後に至つて傳敎大師が日本に出現になり日蓮上人が日本に出現になつて、この法華經があま

をはじめて唱へ出した天台大師の書物は、一つも日本には傳はつて居ない。チヨウド天台大師の晩年と聖徳太子が攝政になられた時どが、僅かに重なつて居る、聖徳太子が攝政になられて（推古天皇元年から四年經つて（聖徳太子が攝政になられて（聖徳太子が攝政になられて）））天台大師は死んで居ります。現代ならば四、五年も時を同じうして居れば、天台の書物が日本にドン／＼傳はつて居る筈ですけれども、昔のことですから傳はつて居りません。聖徳太子は、支那に天台といふ人のあることも知らないうで終られたのでありますから、天台大師の書かれた物などを一行も一字もお讀みになりはしません。其の聖徳太子が、天台大師の影響などを受けないで、御自分の頭腦でお考へになつて、いろいろな經典の中から法華經が最も勝れたものであるといふことを、御自分の考で御決定になつたといふことは、非常に尊い事でありませう。私は此事を幾度もいろいろの會合の席で申しますが、考へ出すたびに

ねく弘まる時機が動いて來たといふことは、どなたも知つて居られる事でありませうし、又此の事は他日何等かの機會に於て更めて申し上げようと思ひませう。今は、法華經の漢譯をした羅什といふ人のことを申述べる縁として、この經がどんな機會に、どんな風に支那にも弘まり、日本にも弘まつたかといふことの大體だけを申したのであります。

### 法華經の目的

法華經を靜かに讀んでみますと、お釋迦様がこの法華經といふ經典をお説きになつた目的が一つある、といふことが見出されるのであります。その一つは、在世の弟子のためであります、在世すなはちお釋迦様が生きて居らつしやる時の弟子、迦葉とか阿難とか、舍利弗とかいろいろ偉いお弟子がおりますが、その在世のお弟子のためにお説きになつた。その時まで四十何年、ほとんど五十年近くお説きに

なつた事の結論として、今まで説かれた事の全體を縮括りをつけるために、在世の弟子のためにお説きになつたといふことが、法華經をお説きになる一つの目的であります。この意味からいへば法華經は結論である、釋尊御一代の御説法の全體をまとめるための説であるといふ風に見えるのであります、モウ一つの目的は、末世の衆生のために説く、末世の世になつて、世の中が混亂して仕方がなくなつた時の大勢の人間のために説くといふことが、モウ一つの目的であります。佛教では、教の弘まる時期をいつても

### 正法の世

### 像法の世

### 末法の世

と三つにわけます。正法の世といふのは、前にも申した教、行、證の揃つて居る時、佛様のお道しになつた教と、その教の實行と、それから實行してみ

少しも人が教といふものを受つけない、斯ういふ時代が末法の世であります。(末といふ字はよく打消の意味に使ひます、こゝもその意味です)

お釋迦様は生きて居られる間に豫めさういふ事をお考へになつて、自分が入滅した後で暫くの間は、自分の考へ通りに教が弘まるだらう(正法の世)。それから暫く経つと、教だけは弘まつて、理窟をこねて、難かしい事ばかり言つて實行しない時が来るだらう(像法の世)。それが暫く経つたら末法の世で、教がなくなつてしまつて教だの道だのそんなものは人間がまるで相手にしない、何でも自分の勝手な事さへやつて居ればいゝ、自分の我慾を貫きさへすればいゝ、さういふ恐ろしい時が来るだらうといふことを、豫め考へて居らつしやるのであります。が、その末法の世の衆生のために法華經を遺して置くといふ事が、お釋迦様の法華經をお説きになる一つの目的であります。さうしてその方が寧ろ在世の

「なるほど斯ういふものだな」といふ證と、この三つが揃つてどれも亡くならずに居る間、それが正法の世であります。すなはち佛様のお心持が間違はずに傳はつて、間違はれずに修行されて居る時代であります。ところが暫く経つと、今度は教ばかりで、行と證がなくなつてしまふ、教は遺つて居る、その教に就ての研究などは大分さかんになつて、理窟はだん／＼發達するけれども、實行する者がなくなる、實行する者がなくなるから、無論それを證つて「なるほど斯うだな」と本當にわかる者もなくなつてしまふ、斯ういふ時代が所謂像法の世であります。像法はかたちといふ意味で、かたちばかりに教が遺つて本當に實行する者はなくなる時代であります。それからさういふ時代も通りすぎると、末法の世になる、末の字は無といふ意味で、法が無くなつた時代のことであります。末の世といふからたゞ後の世だらうと思つてはいけない、モウ教がなくなつてしまふ、

弟子のためといふよりも深い、在世のためといふよりもモウ一層力を打込まれた目的であるやうであります。

### 末の世のすがた

それはどういふ譯かど申しますと、一體人間といふものは、苦しまず悩まずしては本當の偉い事ではできません。佛教でなくても何事でもさうであります。骨を折らすに出来たものといふのに、碌なものはありません。教もまたその如くであつて、世の中が順潮で、世の中が都合が好くて、そんなに苦勞をしないでも暮せるやうな時代に於ては、教をそんなに疎んずる者もないが、そんなに命懸けで求める者もないわけです、いゝ加減で通れるわけです。譬へて申しますと、篋の内に砂を入れて、それから小さい石や大きい石を一緒に入れて、それを兩方の手に持つてソーツと運ぶといふと、砂も小

さい石も落ちないで、どうやらいろ／＼のものがその儘篋の内に入つて居る。ところが此の篋を持つて手に力を入れて搖ぶるとどうであるか、砂はみな篋の目から下に落ちてしまふ、小さい石も落ちてしまふ、さうして大きい石だけが残ります。これと同じことでありませう、世の中が平穩無事でありませう、そんなにひどい悪い人間もなければ、そんなに飛びぬけた善い人間もない、みな似たやうで保ち合つて居る。ところが世の中が險惡になり複雑になつて、篋を搖ぶるやうな時代になつて来ると、悪い奴はド／＼落ちてしまつて、善い者だけが少し残る、といふやうな風に選別けられることになる。これは世の中の事がすべてさうであります、現代の時代を考へて見るとさうでせう、現代は人間の選別が行はれて居る時代です。だから一方に於ては、自分の思ふ事を勝手にやつて居つて、少しも遠慮會釋をしないといふ人間が殖えて来る。これは誰でも往來を歩い

てみると判ることですが、この頃は往來を歩くとかさされ通しに威かされて居る状態です。吾々の子供の時には人力車といふものがあつて、人を乗せて走するのに「ハイ御免なさい」と言つて行つたものです。ところが此の頃「御免なさい」ナンと言つて歩く者はありはしない、自動車でイキナリ後ろからブー／＼とやつて、威かして人を選けさせる、斯うなつて来た、たいへんな違ひです。往來を歩く方も、昔は人力車が「御免なさい」と言つて通ればスグ避けたものですが、この頃自動車の上から、「御免なさい」と言つても誰も退きはしない、ブー／＼とやつて威かさなければ退かなくなつて来た、さういふ風に世の中は異ふのであります。それから吾々の子供の時には、廣告なども言葉が丁寧でした、「今度斯ういふ品物を賣出すに付ては、良い品物を廉く賣るから、何卒御買ひ下さい」といふ風に、丁寧な文句を使つたものです。この頃はそんな

事を言つたんでは人が買はない、「これが現代の流行だ、この流行の品物を買はない者は馬鹿だ」といふやうなことを書いてある、馬鹿になつては大變だから買はうといふことになる。物を一つ買つるのでも威かさないと買れない、お互に威かしつこをして居る、ひどい時代になりました。世の中が無遠慮になつて、遠慮などをして居つては何にも出来なないといふことになつてしまつた。それが正しく末法の世の相であります。

だからさういふ時になると、モウ遠慮して居られないのですから、悪い事をする者は思ひ切つて悪い事をする、以前は少しは遠慮して居つたけれども、此頃はモウ遠慮などはしない、「何が悪いんだ」といふやうなことを言つて威張つて居る、「泥棒をするのが何が悪いんだ」といふやうになつて来る。人などを殺しても何とも思はない。聞く方もだん／＼刺戟が強くなつて来るから、一人ぐらゐ殺されても

何とも思はない。「また人殺しがあつた」「殺人死んだ?」「一人だ」「何だ一人か、つまらない」……と言ふ、七八人も一緒に死ななければ死んだやうな気がしないといふやうな、恐ろしい時代になつてしまつた。さういふ時代が所謂末法の世であつて、人間がみな我意が募つて、俺が／＼といふことばかり考へて居る。さうすると悪い事をする者はモウ大威張で悪い事をする、「教だの道だの、そんなものがあるものか」……、親父が何か言ふと「ナニ親父などは頭腦がふるい、そんなことを言つて居つて堪るものか」といふやうになつて来る。

### まことの教を求む

それならば總ての人間がさうなるかといふと、大體はさうですけれども、その中に於て、世間がモウ息の詰るやうな時代になつた時に、「これではいかに、何とかしなければ此の儘では世の中は立行かな

い、何としたら世の中のこんな息の詰るやうな状態を變へることが出来ようか、世の中を一つひつくりかへすにはどうしたら宜からう」斯ういふ心持を發す人が極めて少数でも出来て来るのであります。それが頼りです、これは決して澤山は出来ない、初めからさういふ人は澤山あるものではない。大多數の人はやはり享樂主義か利己主義かなにかで、無遠慮にドン／＼やつて行く、これはモウ仕様がない。けれども皆が皆さうではない、極めて少數の人であるけれども、「これではならぬ」と氣のついた人が出て来ると、さういふ人の要求は眞劍の要求であります、心の底から出たのですから……、「先祖代々念佛だから念佛を唱へよう」といふのではない、そんな便宜のものではない。「これではならぬ、こんな事では世の中はつまらないから、何とかしようやないか」といふ、心の底から出た要求でありますか

ら、さういふ人が眞劍になつて求めて居るときに、本當の尊い教があるといふと、斯ういふ人の要求とその教とが一致するから、そこでまつくら闇の世の中が今度は明るくなる機運がそこに動いて来るわけでありませう。

それを釋尊が見越されて、一つは自分の在世の弟子のためであるが、一つは末法の世の多くの衆生のために、一番良い教を遺して置かう、これは途中で廢れるかも知れないけれども、いつかさういふ時がきつと来るにきまつて居るのだから、さういふ時がしい時が来たときに、いゝ加減な教では役に立たない。いゝ加減な教だと、ボン／＼刎つけられてしまふ。末の世になつてさういふ恐しい時代になると世相が悪くなるといふけれども、つまり人間の頭腦が鋭くなつて、人間が批評的になる、批評的になるから、いゝ加減な事では刎つけられてしまふ。今の世の中がさうでせう、若い人でも何でも批評だけは相

當うまくやる、だからいゝ加減な事は刎つけられてしまふ。「これから西の方へ行くと極樂があるヨ」ナシと言つても、たいそれだけでは承知しない、「西の方といつて何處だ、だん／＼西の方へ行けば地球は圓いから、舊の所へ戻るぢやないか」といふやうな事を言ひ出す、「地獄といふ恐ろしい所があるヨ」と言つても「地獄は何處に在る？」地面をだん／＼掘つて行けば亞米利加まで穴があいてしまふ、亞米利加まで掘つたつて地獄なんかありはしない……斯うなつて来る。いろ／＼の學問が發達して、研究が進んで来ると、生はんかな教では人が受つけない非常に批評的になつて居る譯であります。

そこでどんな批評が来ても、どんなに嚴密にいらべて来ても、どんなに突か／＼つて来ても、あらゆる問題、あらゆる疑問に對して明快なる答が與へられるやうな、ドッシリした土臺を有つて居る教でない、末法の世には弘まらなないので、世の中に負け

てしまふ。教といふものは實行さへすれば、簡單な教だつて大きな力があるのは書つて居ります、例へば、嘘を吐くなどいふ簡單な教でも、それを皆が成る程と思つて、誰も嘘を吐かないことになつたら「嘘を吐くな」といふ一つの教でさへもその効果は非常に大きい。盗をするなどいふ、簡單な事ですが成る程と思つて皆が盗をしないやうになれば、「盗をするな」といふ教でもかなり効果があるのです。けれども末の世になつて来ると、それでは人が承知しないやうになる、「嘘を吐くな」と言つても「嘘を吐くのが何が悪い？」となつて来る。「盗をするな」と言つても、「盗をするのが何が悪いのだ」となる。「親に孝行しろ」と言へば「どうして親に孝行などする必要があるのか、ナニも頼んで生んで貰つたんではない、頼んで育て、貰つたんではない、勝手に生んで勝手に育てたんだ、孝行などする必要はないぢやないか」……「お前そんな事を言つたら



日本の國が潰れてしまふぞ」「潰れたつてかまはない、俺は別に注文して日本の國に生れたんでも何でもない」……斯ういふ奴が出て來るのです。さういふ時代には、簡単な教ではテンで人が寄りつきはしない。「お前は日本の國に生れた光榮を感謝しろ」と言つても「感謝もナニも出來るものか、俺は今日でモウ三日も飯を食はないんだ、感謝よりも握り飯の一つも呉れ」となつて來る。さういふ時になるとどんな問題を持つて來ても、何處からどう突いて來ても、何處からどう搖つて見ても動かない、堅固なドツシリとした基礎を有つた教でない、この末法の世の人を殘らず救つて、このくら闇の中に光明を投げ込むといふ大きなはたらきは出來ないのであります。

それを佛様が豫めお考へになつて、御自分の世に居らつしやる時のお弟子のためとしては、五十年の説法の結論として、最も高い教を説かれたのですが

たことだと感じなければならぬわけですが。お前が斯ういふ風にやれと言はれるそのお前といふのは、自分に直接にお釋迦様が仰しやるのだと、斯う受けないといけない。まア私のお話でさういふ風に説明ができるか、できないか、私も出來るだけのことをやつて見ますが、さういふ風に私はこの經典を取りたいと思つて居ります。

一體佛教といふものは、さういふ風に、末世の自分に與へられた教であると取らなければいけない。だから經典の中にある事柄は、二千年、三千年の昔のことだと思つて、夢物語のやうに思つて解釋してはいけないのであります。これを自分の身にどう受取るか、この教を自分が何處をどう捉へてどう實行するかといふやうに、自分の今の生活といふものとこの教といふものを離れないものとして解釋し、離れないものとして考へて見るといふことが大事であります。それが出來さへすれば、この經典の中の

その五十年の結論として説かれる最も高い教ならばこれならいつの時代になつても大丈夫である。奥の奥を説いて居るのだから、これなら大丈夫だ、これさへ確かり掴まへて居れば、末の世にこの教を弘めて、どんな人間がどんな疑問を持つて來ても、どんな面倒な事を言つて來ても驚きはしない。それですから、この法華經は在世のためでもあり、また末世のためでもあるが、殊には末世のために最も役に立つ、斯ういふ意味で説かれた經典なのであります。

### 自分のためのをしへ

そこでこれからお互にこの經典を讀んで参りますときにはこれは、お釋迦様のお弟子のために説かれたのですが、しかし一面末世の衆生のために説かれたものである。しかもその末世の衆生のためといふ趣意の方が主なのでありますから、お經の中に「汝等」とあるときには、これは吾々に直接に仰しやうに、餘所に眺めて居るならば、これは大したことはないのであります。

一字一句でも本當に掴まれば、その掴まつた一字一句がたいへんな力になります。たゞこれは有難い書物だ、三千年の昔に佛様が靈鷲山といふ山でお説きになつた、面白い意味の深い經典ださうだといふやうに、餘所に眺めて居るならば、これは大したことではないのであります。

信仰の事といふものは、チョウド相撲を取るのと同じことで、両方から力が入らなければ相撲にならない。私はいつでも學生などに言ふのですが、相撲を取るとおもへ、両方から力が入らなければ相撲にならぬ。向ふばかり力が入つても、こつちが「投げぬらなければ」と言つてフワツとして居つては、相撲ならないぢやないか。信仰の事はやはりそれである、両方に力が入らないといけない、佛様は本當に魂を籠めて、心のありたけの力を籠めて經典を吾々に遺して下さつてあるのです。だから吾々がやはり相撲の相手になるつもりで、本當に力を入れてこ

れを読み、これを身に行ひますと、それに應じて何等かの反響があるのであります。それに就て天台大師の言つたことばに、  
感應の道交る。

「感應道交」

(「文句」)

といふことがありますが、一方が感ずると一方が應ずる、感と應とがないといけない。これは人間同士でもさうです、親子であつても、夫婦であつても、兄弟であつてもやはり感と應です、一方が「有難い」と思へば、向ふも「可愛い」と思ふ、一方があの人は頼もしい」と思へば、一方も「骨を折つてやつた甲斐がある」と思ふ感と應とないといけない。こつちが佛様を本當にお頼み申して、佛様の教に力を打込んで行く、さうするとその佛様の教といふものが吾々の心にいろ／＼の力を與へ、いろ／＼の作用をして来る。こつちがボンヤリして居れば、いくら尊い教でも何等の効果もない。だからいつでも「感應

の道交る」で、兩方から行き合つて交るやうにならなければいけないのであります。

私などが説明をすることは、元來が凡夫ですからそんなに佛様の本當の御精神を盡すだけのことは出来ませんけれども、皆さんの方でそのつもりでお聴き下さつて、又よくお考へになれば、私の説明の言葉などはどつちでも宜いけれども、法華經の文を通して、佛の大慈悲のお心持と皆さん方のお心持とが感じ合ひ、通じ合つて、そこに大きな力が生れて来るであらうと思はれるのであります。どうぞさういふつもりでこれから御一緒にこの法華經を讀んで参りたいと思ひます。

「妙法蓮華經」の字義

それから妙法蓮華經といふことばの意味であります。このことばの意味を今こゝでいくらか説明しても、なか／＼解りにくいものです。一體書物の名前と申してこれから法華經といふものを讀むのに、まるで意味も解らずに讀むのもあまり感心しないこととありますから、先づ今は「妙法蓮華經」といふことばのザツとした意味だけを申上げて置いて、深い意味は本文を讀んで行く間にだん／＼解つていたいくことにしようと思ひます。

「妙法蓮華經」とありますが、「經」のことは前に申しました。佛様の教をまとめて後の世に傳へるものが經である、これは「ひも」といふ字で、美しい華を綴りしるやうな風に、佛様の尊い教を一つまみにして後に傳へるのが經だといふことをお話いたしました。

の説明を初めにするのは愚なことです、讀んでみて初めて解るものです。私共學校で學生に講義をして居りますけれども、定義といふものを初めにするのは愚なことです、「哲學とは何ぞや」といふやうなことを言つて、「哲學とは何々の學なり」と定義を述べますけれども、學生はノート・ブックに書くだけで解つては居ない。それよりも實際に講義をして、哲學に就ての話を或る程度まで進めて行くこと、或る程哲學とは斯ういふものだといふことが解るのです。初めからやつても仕様がなない。「東京とはどんな所だ」、東京を一度も歩いたことのない人に、「東京とは日本の都なり」と言つてもサツパリ解らない。「東京とは日本の都だ」「あゝさうか、日本の都といふのはどんな所だ」「それは東京だ」……それでは幾ら言つても同じことです。それだから妙法蓮華經の深い意味を初めに説明するといふことは實は愚な事とせう、法華經を或る程度まで讀んで行

法とは何か

そこで其の經はどんな經かといふと、妙法を説いた經であります、妙法とは妙なる法といふことですから、そこで先づ「法」といふことから考へてみる。妙法蓮華經と五字書いてありますけれども、一番大事なのは「法」といふ字です、佛様は法を説いた、その法をまた吾々が學んでそれを實行するので、すから、法といふものが一番大事なものになる。

「法」とはどういふ意味であるかといふと、いろ／＼の意味を挙げれば際限がないけれども、極く大ザツバに別ければ三つの意味があります。一番浅い意味でいふ法といふのは、「法則」「法度」といふ意味になる、これが世間的の一番浅い意味です、人間は斯うすべきものだと定める、それが法です、人間は斯ういふ事をしてはいけないと定める、これが法です、法則の意味になります。斯うすべきである

の法であります。

ところがその法則が何故立てられるか、何故そんなに法度を作らなければならぬかといへば、それは人間お互の幸福のために、人間お互の都合の好いためでせう。皆が勝手次第にやつて居つては、結局皆が困つてしまふ、だから人間お互の幸福のため、人間お互の便益のために法則、法度を立てるのであります。しかし人間には利己心、我儘な心持があるから、お互のためだと知つて居るけれどもツイ守れない、これはどうも仕様がない。若しその法則、法度がみな守られれば、監獄などは要りはない、けれどもいくら法を作つても、泥棒をする者は泥棒する嘘を吐く奴は嘘を吐く、七時と定めても、七時に来る人もあれば来ない人もある、これは仕様がない。だから法則や法度を立てつ放しではいけない、若し法則、法度ばかりで世の中を治めようとするれば、所謂「免れて耻なし」といつて、法律に反いても言譯

斯うしてはならない、斯うやるがよろしい、斯ういふやうにして人間の法度が定まる、これが一番浅い意味でいふ法です。國の法律といふときの法もそれです、刑法とか、民法とか、裁判所構成法とか、いろ／＼の法があります、みなそれです。斯うすべきだ、斯うしてはならない、斯うした方が都合が好い……斯ういふ風に人間が定める、さうして定めたら守らなければならぬ。斯ういふのが普通の法であります。

又例へば斯ういふ會を開いて、午前何時に開くとか、或は午後何時に開くとかいふことも、これは皆で定める、定めたら守らなければならぬから、これも簡単に言へば一つの法です。午後七時開會といふこれも一つの法です。さういふやうに、お互の都合の好いやうに、斯うしよう、斯うしないやうにしようといふ風に、是非とも守らるべき定りを立てますこれが法則若くは法度といふ意味で、一番浅い意味

のつくやうな事を皆が考へてしまふ、どうも仕様がない。或る學校で、寄宿舎の門限が過ぎて夜おそくなつてから、學生が塙を乗り越えて歸つて来る、寄宿舎を預かつて居る先生が非常に心配をして、大きな貼札をして、此の頃塙を乗り越える者があるさうだが怪しからぬ事だ、以後塙を乗り越えて入る者は嚴罰に處するといふことを書いて置いた。すると學生は相變らず遅く歸つて来て、みな門を乗り越えて入つて来た、「塙を乗り越えていかんといふなら、門なら宜からう」と言つたといふ、これでは何にもならない。

しかしどうも人間といふものはさうなる、これはまことに困つたのですが、さういふ風な話がいらいろありませう。近江の國の琵琶湖の近くで大きな橋を拵へて、その橋を殿様が渡り初をなさるまでは誰も通してはいけないといふので「このはしわたるべからず」と、誰にもわかるやうに假名で制札を書いて建て、置いた。すると一人の侍が大手を振つて

橋の上をドン／＼渡つて居る、それから番人が「コラ／＼此の制札が見えないか」と言つて叱ると「はしを渡つてはいけなから真中を歩くのだ」と言つたといふ話がある。さういふ風に人間といふものはなかく／＼狭いもので、法則、法度を守らないのであります。それでは折角の法度が立ちあはしない。

そこで、何故に皆が法度を守らなければならぬか何故にお互が我儘をしてはならぬかといふことを、人間の本性に基いて教へるといふことが法の本になる。これが第二番目のモツと進んだ考であつて、所謂「教法」です。法といふことは、この教法の意味になるとモウ少し深くなつて来る、たゞの定りではない、教へる法である。人間は斯ういふものだから、斯ういふ事をやるのが良いのだぞ、人間は斯ういふ本性を有つて居るから、斯ういふ事をやるのは間違つて居るぞ、といふ風に、人間の本来の性質に

基いて教を興へる、この教のことを法といふ。さうするとこれは前の法則ナンといふものよりはモツと深い意味のものである、孔子がお説きになつた、釋尊がお教へ下さつた、耶蘇がお教へになつた、マホメットが教へたといふ、さういふのは大概はこの第二の意味で教法といふ、だから法といふ字が教の意味になる。説法するといふことは普通さういふ意味で、教を説くことです。人間は斯うすべきものだから、教を説くことあります。或は法を學ぶといふこともそれです、人間は如何にすべきものかといふことを學ぶ、斯ういふ意味になると教といふ意味になる。佛法といふのも大概この意味です、佛様の教であります、それは單なる法則より意味が深い、人間の本来の性質に基き、世の中の本當の性質に根柢を置いて立てた教であるから、これは意味が深いのであります。

ところが更にモウ少し深入する、とこの教といふ

ものは何を本にして立てたか、斯うなつて来る。佛様が自分で勝手にきめたのではない、孔子が勝手にきめたのではない、佛が教を説いた、聖人が教を説いたといふけれども、佛だつて聖人だつて吾々に無理な事を強いて押つけるのではない、人間といふもの、本来の性質を見きはめて、その本来の性質を完うするための教である。さうなつて来ると、その教といふもの、基く所は何だといふことになる。佛様が、自分で斯うやるのが都合が良いからといつて説いたのではない、孔子さまが、斯うやる方が宜さうだといつてい、加減にやつたのではない。人間といふもの、又人間は天地の間に生きて居るものである、人間は草や木や山や川や、あらゆるものと一緒に生きて居る、その宇宙萬物の根本は性質を見きはめて、その上に立つた教でなければ、教としての役に立たないわけでありませう。だからさういふ意味で言ふと、法といふものが「實在」といふやうな意味

になつて来る、或は「原理」といふやうな意味になつて来る。法といふことは、物の眞實の性質といふことだ、人間といふものは斯ういふものだ、その人間の本来の性質に基いて、人間は斯うやれといふ教が出て来る。天地萬有は斯の如きものである、その斯の如きものだといふ本當の原理に基いて、人は世に處するには斯うすべきものだといふ教が出て来る。斯ういふ意味になります。

ですから法といふ字を三種に解釋する、極く淺く考へれば法則、法度、モウ少し深く考へれば教、モツと深く解釋すれば根本の原理、或は宇宙の眞理といふことばを使つてもよろしい、絶對の眞理といつてもよろしい、法の字をさういふ風に考へる、法といふのは佛様が吾々にお教へになつた教であるが、その教といふものは、根本は、天地萬有の一切の物の存在する一番根本の原理、根本の眞理といふものを本にした法だといふことになつて来る。だから法を

學ぶといふことは、たゞ佛様のお説きになつた教のことばを學ぶことではなくて、佛様のお教へになつたその教の土臺になつて居るところの、萬古にわたつて易らない絶対の眞理を學ぶことだ、斯うなつて來るのであります。

### 妙なる法

そこで其の法たるや、尊いと言はうか、大きいと言はうか、深いと言はうか、何でも言ひ様がない、であるから、これを「妙法」といふ、妙といふのはあらゆる形容を超越し、あらゆることばの意味などで言ひ盡せないやうな深いもの、意義のあるもの、これを妙法と言ふ、ですから私共が妙法を學ぶといふことは、最も勝れた教を學ぶといふ意味に、一通り解釋してよろしいが、モウ少し深く言へば、その教によつて表はされた絶対の眞理を學ぶことである。更に深く言へば、その教によつて顯はされた人

れは蓮の華の如きものである。印度の生活に於て、蓮の華ほど美しいものはない、私は印度へ行つて見てはじめて判つたのですが、それは美しい、とても不忍池の蓮どころのものではない、紅いのもあれば、白いのもあり、青いのもあれば、黄色なものもあります、それは實に美しい、何とも言へない美しいものです。ですから法の妙なることは、恰も蓮華のやうなものである、そこで「妙法蓮華」といふ、これは法といふことの説明であります。その法はどんな法だ？ 妙なる法だ、その妙なることはどんな風だ？ 蓮華のごときものだ、だから、「妙法蓮華經」といふのであります。

しかしながらモウ少し深入して言ふと、その蓮といふものは華と果と一緒にある、さうして華の開く時に果が下に出來て居る、華が落ちて後に果がのこる、華と果といつても一緒にあるといふ、そこから法の妙なることに譬へまして、目の前の小さい一つ

間の本當の意義、人生といふことの本當の根柢になる意義を學ぶのだといふことになる。

それでありませうから、この字で書いたお経ばかりが法華經ではない、こんな字で書かない法華經もあるだらう。ことばでは言へないものがある、どんなにことばを巧みに並べても言へないことがある、それが妙法です。そのことばで言へないやうなものを學ぶために、ともかくにも文字に現はしたものが、この字に書いてある法華經であります。これがお互が本當に學ぶことによつて、この文字を通してこのことばを通して、ことばにも言へない、文字にも書けないやうな本當の土臺のものを一つ掴まなければいけない。それが本當の妙法であります。

### たとへば蓮華のごとし

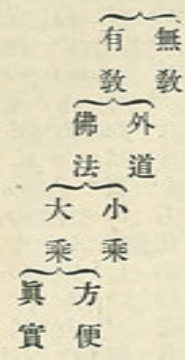
その法の妙なることを何と言はうか、若し人間の眼の前に現はれたものに譬をとつていふならば、そ

の出來事の内、深い絶対の理が顯はれて居る。又佛様のどんな方便の教の中にも、絶対最高の意義が含まれて居る、斯ういふ意味をあらはすために、蓮華を特に譬に使つたといふことも言へるのであります。しかし其の事は今はザツと申して置きます、難かしく言へば、この現象界の一つ／＼が絶対の大きい力を現はして居る、假に淺はかに説かれた佛様の教がみな佛様の御心の底から出た眞實の教を仄めかして顯はして居る、といふことになるのであります。そこから華と果と同時に存在する蓮華といふものを採つて來た、同時にまた美しいもの、數ある中に、特に蓮華といふものを用ひて來たのだといふ意味もあります、その事は今あまり深入して申しますと、まだ本文を讀まない間に解りにくくなりませうから、大體その邊にして置きまして、其の事は本文をだん／＼讀んで行く間にモウ少し詳しく話すことにいたします。

ともかくにも法華經といふものは、『妙法蓮華』を説かれた『經』でありませぬ。だからこの名號に於てわかつて居るやうに、佛様の教といふものが、この經典の中に最も明確に説き示されてあることは略々想像ができるのであります。

### 教をえらぶ順序

それで私共が教といふものを求めて行く順序を大體考へてみますと、斯ういふ風になつて行くのであります。



一體人間は教の無いのと教のあるのとどつちが良いか、まるで教の無い人間といふものもありません。例へば亞弗利加の内地に居る人喰人種だとか、或は

い。そこで教の無いのと教のあるのとどつちが良いかといへば、それは教のある方がよい。

教のある中に於て、『佛法』といふ佛様のお教へになつたものと、『外道』といふのは佛法以外のものをみな含む、それとどつちが良いかといへば、それは佛様の教の方が勝れて居るだから。教を學ぶといふことになれば、その教の中に於て、佛法以外の教と佛法とどちらを選ぶか、それはモウ佛法の方が勝れて居るから佛法を選ぶといふことになる。

それから佛法の中に於て『小乘』と『大乘』とある、前講にも申したやうに、たゞ一人々々の煩悶や苦惱を除くだけの教と、すべての人を一緒に教へ導いて共に助かる教と、どつちが良いかといへば、これは一人々々助かるものよりは、すべての人を助けるに如くはないから、大乘の方が良いとなる。

その大乘の中に於て『方便』といつて聞く人の程度に應じて一通り説かれた教と、『眞實』といつて

北極に住んで居るエスキモーとか、その他ホツテントット人とかいふやうな、人間だか猿だかわからないやうな人種、斯ういふものは教は無い。それから教のある人間がある、先づ日本人、それから支那人、支那人は國際聯盟などいろいろやつて居る所を見ると随分亂暴ですが、あれだつて教は相當ある、正義だの人道だのといふことも少しは知つて居る、さうすると、教の無い者と教のある者と比べれば、教の無い方は野蠻未開で、教のある方が勝れて居るでせう。先づこゝから考へる、人間を相手にする時には、この人間は教のある者か、教の無い者かといふことを第一に見る。教の無い者なら、先づ教の尊いことを知らせてかゝらなければならぬ。教の無い者をつかまへてイキナリ『そも／＼法華經は……』と言つても、それは解らない。エスキモーみたいな者をつかまへて『貴様、法華經を信じろ』と言つてもだめです、それは教の無い者だから、テンで解らな

お釋迦様が自分でお覺りになつた事を打明けられた本當の教と、どつちが良いかといへば、それはお釋迦様の本心を打明けられた教の方が勝れて居るから眞實の教を選ばうといふことになつて来る。

私共が今法華經を學ぶといふのは、斯ういふ風になつて来て、教の無いより教のある方がよいから教を學ばう、教の中に於ては外道より佛法が勝れて居るから、佛法を學ばう、佛法の中に於ては小乘より大乘が勝れて居るから、大乘を學ばう、その大乘の中に於ては方便に説かれたものより、佛様の眞實の心持を打明けられた法華經といふものがモツと深いものである、殊に前にも申したやうに、末法の世の中が非常に難かしくなつて来ると、いふ加減の教ではとてもだめだ。そこでこの眞實の教を學んで行かう、斯ういふ順序になるのであります。ですから

他のものは價値が無いといつて捨てるのではありません。たゞ選んで行つて、自分の心の中心とするも

のはどれを選ばうかといふやうに、選りわけて行く順序を申したのであります。

さういふ意味で今私共は法華經を選んで、この法華經は佛様の本心を打明けられた教であるから、これによつて一つ自分達の修行をして行かうといふ段取になつて參つたのであります。

(第二講了)



### 念告

七四

從來本部に於て正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以て御清援相仰ぎ居申候處彌々時代の趨勢に鑑み爰に本團は一大飛躍を計畫仕り多大なる犠牲の下に先づ本誌の増大を圖ると共に正團員と誌友とを區別すべき必要相逼り申候に付本誌巻頭略則御諒承の上何卒爲法國爲一切衆生團員として最善の御贊助あらんことを偏に奉候

### 財團 統一團

6

### 記事

本多日生上人遺稿 聖應院日生上人畢生の大志願を以て一切經中の要文を抽出し、之を大藏經要義と名づけて往年第一卷より第十一卷に到る高著は、各方面に大變動を與へ貢獻する處極めて多かりしが、偶々魔陰の障ふる所となりて一時出版休止の状態なりしも、日生上人は病中猶ほ其の聖業の達成に勇精され、遂に法華部の外は略完了し蒐むる所の聖經一百七十餘 數百卷二千枚の原稿を見るに至り。

今回の講妙會 天晴會 自慶會等宗門の内外を問はず苟くも本多上人舊知の僧俗有志發起し去る一月十七日學士會館に相會し各名士の協定を以て愈々之れが上梓に決定せりと。

知法思國會新年會 一月十六日午後五

時より日比谷松本樓に於て門下各派有志の新年懇談會を開催し佐藤卓藏中將の詔書奉讀、柴田理事長の賀詞、小林一郎先生の講演ありて後晚餐中に井上清純男佐藤鐵太郎中將 牧野駿男代議士三吉顯隆師等多數卓上感想談ありて七十餘名異體同心となり九時散會せり。

### 教報

#### 本部團報

奉祝新年會 一月七日午後四時より本部に於て、日嗣の皇子第一の新春を迎へ其の奉祝と共に新年會を開催す、定刻極大齋正鈴木日雄上人大學師となつて法要を虔修し、五時より上田理事長の挨拶ありて後來實岩野直英少將佐藤鐵太郎中將並に小林一郎先生の感話に滿堂多大なる教訓に浴し、法悦十二分を以て開壇に入り、各團員諸氏の所感披瀝且つ最後に荒木陸軍大臣の皇道精神をレコードを通じて傾聴し、感謝報恩の熱情を以て七時閉會す。

### 横濱教誌

十二月四日 夜 中區壽町長久保氏方にて集り。「釋尊の大恩」磯部先生  
同九日 夜 磯子高橋氏方にて集り。小西

七五

新加盟者

東京市杉並區方南町二二三三

田仲富重殿

同 本所區綠町三ノ十六篠崎方

矢代多一郎殿

同 四谷區南寺町三十八

天野辰子殿

同 小石川區音羽町五ノ二

望月重一殿

同 横濱市磯子區岩瀬町

稻葉いく子殿

同 東京市牛込區納戸町二十二

久野柳子殿

同 澁谷區水川町二十三

直井良一郎殿

(磯部氏御紹介)

(高橋一郎氏御紹介)

二本松教信

歸東京より御來講。「釋尊の御成道」磯部先生  
 同十三日 午後三時より程ヶ谷區峰岡町平  
 阿氏方にて、夜は中區千歳町高田氏方にて集  
 り。小西師御來講。  
 同十五日 夜 神奈川區二本榎町金子氏方  
 にて集る。小西師御來講。  
 同十八日 午後三時より鶴見區生麥町貝塚  
 氏方にて、夜は神奈川區榮町石毛氏方にて集  
 り。小西師御來講。  
 同二十四日 夜 磯子北山氏方にて集り。  
 「歳暮の信心」磯部先生。  
 同二十七日 夜 神奈川區三ツ澤齊藤氏方  
 にて集り。小西師御來講。この夜の集りが、  
 當地に於ける本年度最後のものとなつた。

十二月九日 蓮華寺本堂新築棟上。  
 同十日 蓮華寺上棟式檀信徒一同にて盛大  
 に舉行す管長祝下を始め先師大徳各位より祝  
 電祝詞を頂く。  
 同十三日 午前四時一分旭川部隊滿洲駐劄  
 交代兵通過す因つて歡送す。



同十五日 救濟事業二本松傳教不榮會托鉢  
 修行。  
 同十八日 午後十時四十四分八師團凱旋部  
 隊通過す因つて歡送す。  
 同十九日 午後一時五十七分山形部隊凱旋  
 にて通過す因つて歡送す。  
 同二十二日 午後十時四十四分八師團凱旋  
 部隊通過す因つて歡送す。  
 同二十四日 午前一時二十七分青森部隊凱  
 旋にて通過す因つて歡送す。  
 同二十四日 午前四時二十一分山形部隊凱  
 旋にて通過す因つて歡送す。  
 同二十七日 不榮會歲暮同情資金勸募の爲  
 め托鉢修行。  
 同二十八日 於蓮華寺題目講修行。

寄附維持金團費詰料領收

(自昭和八年十二月二十一日) (至同九年一月二十日)

金貳圓五拾錢也	東京	四仲	富重殿	金壹圓貳拾錢也	東京	内海	順二殿
金貳圓五拾錢也	東京	矢代多一郎殿	金壹圓貳拾錢也	東京	齊藤	一郎殿	金六圓四拾錢也
金貳圓貳拾錢也	東京	天野	辰子殿	同	井上	日光殿	金貳圓貳拾錢也
金壹圓貳拾錢也	名古屋	伊藤	爲壹殿	同	河本	梅藏殿	同
金壹圓貳拾錢也	名古屋	石田	よしの殿	同	能勢	頼武殿	同
金壹圓貳拾錢也	大阪	富田	清子殿	同	野間	平太郎殿	同
金壹圓貳拾錢也	東京	佐藤	和子殿	同	加藤	重太郎殿	同
金壹圓貳拾錢也	東京	關原	忠三殿	同	田中	峰太郎殿	同
金壹圓貳拾錢也	大阪府	宮原	六郎殿	同	本間	寧夫殿	同
金壹圓貳拾錢也	大阪府	植村	次郎殿	同	後藤	友藏殿	同
金七圓八拾錢也	神奈川縣	山本	通辨殿	同	賀久	真藏殿	同
金貳圓五拾錢也	東京	山室	千枝子殿	同	五味	季六殿	同
金貳圓五拾錢也	東京	佐藤	五郎殿	同	木村	龍子殿	同
金拾圓也	同	和賀	謙介殿	同	大谷	又吉殿	同
金拾圓也	同	石川	景藏殿	同	村松	菊野殿	同
金貳圓貳拾錢也	同	深田	福道殿	同	萩野	慶三殿	同
金壹圓貳拾錢也	大阪	津田	高壽藏殿	同	鈴木	源八殿	同
金貳圓貳拾錢也	山口縣	内倉	治吉殿	同	横山	惠正殿	同
金貳圓貳拾錢也	東京	佐藤	大太郎殿	同	名古屋	登田切工場殿	同
金貳圓貳拾錢也	同	戸松	あさ殿	同	廣島縣	村上信夫殿	同
金貳圓貳拾錢也	愛知縣	須賀	賢之助殿	同	山形縣	川野次郎殿	同
金拾圓也	東京	須賀	賢之助殿	同	永見	京造殿	同
金拾圓也	同	須賀	賢之助殿	同	池田	悦太郎殿	同
金六拾錢也	同	須賀	賢之助殿	同	久野	柳子殿	同
金六拾錢也	同	須賀	賢之助殿	同	直井	良一郎殿	同

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計



本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖語 錄改版 特價 金壹圓八拾錢
- 一 日蓮主義本領 送料共 金貳圓拾錢
- 一 法華經要義 賜天 全 金貳圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢
- 一 佛教の本質と其價值 全 金貳拾五錢
- 一 法華經要品 全 金五拾錢

以上施用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六一ノ七

財團法人 統一團出版部

振替東京九四〇番

一月「教」誌  
 定價一冊 金五拾錢  
 送一年前金 金壹圓貳拾錢  
 送一月前金 金壹圓貳拾錢  
 送一月前金 金壹圓貳拾錢  
 發行所 振替東京九四〇番

統一團定價

一冊 金貳拾錢 送料壹錢  
 半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共  
 一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意

▲御申込ハ總テ前金ノ事  
 ▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
 ▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御  
 通知ノ事

昭和九年一月廿四日印刷納本  
 昭和九年二月一日發行

(第四百六十七號)

不許複製

東京市小石川區音羽町六一ノ七  
 編輯兼 發行所 磯部 滿事  
 印刷人 鈴木 日雄  
 東京市品川區南品川二ノ一八一  
 印刷所 都印刷所  
 電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團

電話牛込五三三六番  
 振替東京九四〇番

次 目

本佛の感應(中篇續)……………	日生上人
日蓮教學講座(第六回)……………	河合陟
日什正師諷誦章講話(其七)……………	梶木顯正
法華經講話(第三講)……………	小林一郎
記 事	

○各地教信      ○寄附團費誌料領收

第三十九年三月號

統

一

法財  
八團  
統  
一  
團  
發  
行